

らせるとして、先づ父の一番氣にし給ふ母の病氣全快をお知らせしたことは、子としての至情がよく表はれて居る。

「御祖父様はいつもの通り朝早くより御目ざめにて、私共の起き候頃には、はや朝顔の鉢を並べて、昨日は九つ咲きたり、今朝は十二咲きたりなどと御喜に御座候。」——祖父様が相變らず丈夫で、好きな朝顔の盆栽をいぢくつて、安らかに清く生を營んで居る。子たる旅の父が、之を知つたときどんなに嬉しくあつたことは容易に想像し得る。

「又御宮裏の田も、本年は水も十分に御座候。少しも御案じ下さるまじく候。」——農作物の成長如何も亦旅の父の心かゝりの一つである。それは農作物は實に父の生命、否家の生命の一部であるからである。之を知つた父の喜悅は蓋し多大であつたらう。

「日増に暑さきびしく相成り候へば、御身御大切に遊ばされ、一日も早く御歸りの程御待ち申し居り候。」——日千秋の思ひで父を待つ子の至情が紙面の上に溢れて居る。何と美しいでないか。要するに本文は家の消息を報する事の上に、尙旅にある父に對する子の至情の溢れてゐる書簡である。此の美しい感情を深く感味させるといふ所に本書簡文の生命があるのである。

區分

第一時 口語體のを授く。

第二時 候體のを授く。

第三時 練習及び應用。

教法

第一時

▽口語體のを授く(上段のもの)

- 一、目的を告げ、後各自をして自由に一讀させる。
- 二、質問に答へ、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、後自由に二三回讀まさせる。
- 四、内容につき問答する。
- 五、敘述してある事柄をよく理解させ、また旅にある父に對する子の至情をよく味得させる。
- 五、讀み方の練習を行ふ。
- 指名して——また各人自由に。

六、書取。

御手紙 拜見 御障なきか 一同安心 祖父様 朝顔 御宮裏の田 日増に
御體を御大切になさいませ 御歸りを待つ……………等。

第二時

▽候體の授く(下段のもの)

第一時に準じて授く。但し書取らさせる語句等は次の如くである。

拜見仕り候 御全快の由 御祖父様 蠶の世話 朝顔の鉢 御喜に御座候 御身
御大切に……………等。

第三時

▽練習及び用。

一、上段と下段とをよく對照して靜かに二三回讀ませる。

二、質問に答へ、また主要の語句等につき問答する。

三、内容につき問答する。

1、本書簡に於ける要點。

2、流動してゐる子の至情。

四、認め方について問答。

起首及び結尾の有無につき——前文・末文・主文の有無につき——かうした書簡に具備すべき要件等につき。

五、次の候體を口語に直させる。

御手紙拜見仕り候 御障なくいらせられ候由 一同安心仕り候 蠶の世話をなし居られ

候 御喜びに御座候 水も十分に御座候 少しも御案じ下さるまじく候 日増に暑さ

きびしく相成り候へば 一日も早く御歸りの程御待ち申し居り候

(注意) 時間の都合によつては家庭課題とする。

教授上の注意

一、本課に於ては、内容は同一であるが形式上に於ては、口語體のものと候體のものと二種收めである。二種共に習得して之が讀解に習熟させるは勿論だが、とりわけ乙者即ち候體の讀解に重きを置いて取扱ふことが本課の要求であらう。

二、本課を授けるには、先づ上段の口語體の授け、次に下段の候體の授ける。而してその下段を授ける時、よく上段と對照して學習させる。

三、候體の書簡の習得については、候體を作る力をも養ふかどうかは問題であるけれども、私共の考では、候文は之を讀む力を養つて行くが、之を作る力は強ひてなさなくてもよいと思つて居る。従つて本文に於ても、十分之を讀解する力は養ふに盡すが、之を作ることに向つては強ひない考である。故に練習應用の場合に於ても、候文は之を口語に譯することの練習は之を課

するが、口語體のを候文に譯することは課しない考である。

四、形式即ち認方の上に於ては、起首とか結尾とかが備つてゐないが、併し前文・本文及び末文は完備して居ることを知らしめる。また内容上に於ては、かうした書簡にあつては、勿論其の内容は同一でなく、各自の境遇によつてそれ／＼に相違して居ることもよく理解させて置く。

五、本書簡に於ては、發信者の氏名も、受信者の氏名も記してない。此の記してないといふことが、即ち各自をして自由にそれ等を想定させるのに便利である。即ちそれ等の記載のないといふことは寧ろ本文の特色で注意すべきである。

第二十一 水兵の母

要旨

形式上では、新文字の讀み方・書き方、難語句の意義、語法等について知らしめて本文の讀解に習熟させる。

内容上では、一水兵の母の純眞な奉公心を知らしめ、傍ら戦時に於ける日本婦人の覺悟をさくらせる。

教材

一、文字

「尉」——手にひのしをもち、きぬを抑へて其の皺を伸ばす義である。轉じて抑ふ、安する等の義となり、更に轉じて官名の義となつた。漢・吳音共に「キ」で、訓は「ヤスンズ」等である。

「恥」——はづる義である。漢・吳音共に「チ」で、訓は「ハツ」等である。

「願」——本義は大頭の義である。後、念に假借して念じ思ふ義となる。更にねがひの義となる。漢音は「ゲン」、吳音は「グワン」で、訓は「ネガフ」等である。

「精」——一粒選の立派な米の義。一説に米をしらげて純潔ならしめる義である。轉じて純粹・緻密等の義となり、更に精神・精靈等の義となつた。漢音は「セイ」、吳音は「シャウ」で、訓は「クハシ」等である。

「職」——事の微を記す義である。轉じて「ツカサドル」、「ヤクメ」、「ットメ」、「家業」等の義となる。

二、語句

「水兵の母」 水兵は其の後行方不明となつたがために、今は只鹿兒島縣の漁夫の子といふことだけ分つて居る。母の名も亦分らない。

「高千穂」 排水量三千七百噸の巡洋艦であつた。

「一大尉」海軍大尉(今は中將)小笠原長生氏のことである。併し必ずしも實氏名を授けなければならぬといふことはない。

「女々しいふるまひ」「意氣地のないしわざ」といふほどの意味である。

「兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ」「兵士の恥はつまり一艦の恥辱、一艦の恥辱はつまり一國の恥辱だぞ。」と強く叱責したのである。修辭上では漸層法に屬する。

「日本男子」日本人としての特色を具へた男子、即ち忠勇無比で、君國のためには、一命を鴻毛の輕きに比するといふ特色を具へた男子の義である。

「豊島沖の海戦」明治二十七年七月二十五日、豊島沖で行はれた海戦をいふ。此の時に參加した我が國の軍艦は吉野・浪速・秋津洲で、戰の結果は勿論我が國の勝利に歸し、清國の軍艦濟遠は通れて直隸灣にかくれ、廣乙は淺瀬に乗り上げ、自ら火を放つて燒燬し、高陞は我が艦に撃沈され、操江は降服した。激戰約一時間半で我には一人の死傷もなく、艦隊も亦何等異狀がなかつた。

「八月十日の威海衛攻撃」威海衛は清國山東省にあつて、芝罘の東に當る。遼東半島の旅順港と相對して渤海灣の咽喉を扼し、要害無双と稱せられてゐる港である。明治二十七年七月二十五日、豊島沖海戦があつてから、清艦はいたく恐怖して威海衛に引込んで出動しない、我が海軍は之を誘ひ出して撃破せんとし、八月十日、堂々と列を正して威海衛に進み、盛に砲撃したけれど

も、敵は只砲臺から大砲を打つのみで、艦隊は出動の様子がなかつたから、我は遂に引上げたのである。本文は此の事をいふのである。

「やら」「やらん」の略。疑問の「や」と「あらん」との約。

「遠りよなく」「用捨なく」「ひかへめにせず」などの意。

「ふがひなきこと」「いくぢのないこと」「氣慨のないこと」などの意。

「八幡様」古から軍の神として廣く全國に祀らる。特に武家に於て尊崇が深い。祭神は一般に應神天皇と申して居るけれども、栗田博士の神祇拾遺書抄には正八幡は彦火々出見尊・比賣神は其の妃豊玉姬也」とある。

「今の戦争は昔とちがつて云々」昔の戦争ことに源平時代から南北朝時代にかけての戦争は一騎打・拔駈などによつて功名を立てるといふ風であつたが、現時の戦争では一舉一動悉く上官の命令を守り、命令以外には決して個人の自由を許さないのである。従つて個人としてどんな功名手柄を立てても、それを以て軍功としないのである。

「上官」上級の官。

〔附記〕九月十七日に黄海の大海戦があつた。その時參加せし我が軍艦は、松島・嚴島・橋立・吉野・扶桑・浪速・高千穂・秋津洲・千代田・比叡・赤城・西京丸等であつた。高千穂艦は敵艦と相距る四千

五百米の距離を保つて、先づ敵の旗艦定遠を砲撃し、漸次右翼の艦列を猛射したといふことだから、かの水兵もきつと勇しく奮闘したことであらう。

読み方に注意すべき語句

女手おんなて 女々しいめづめづしい 妻子つまこ 軍いくさ 下げてさげ 方々かたかた 日参にっさん

三、文章

第一節(九十三頁三行まで)は一水兵が女手の手紙を読みながら泣いてゐる所を、一大尉が之を見て言葉鋭く叱つた所である。手紙を読んで泣く水兵の無念さ。誤解して叱つたとはいへ、大尉の一言一句は之れ悉く軍人の魂の發露であるといふ點を十分感味させる。殊に「兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ」といふ言の如きは眞に尊くまた力の満ちた句である。

第二節(九十四頁二行まで)は、水兵は大尉の意外の言葉に驚いて手紙を大尉に示す所である。「それは餘りなお言葉です。私には妻も子も有りません。私も日本男子です。何で命を惜しまませう。どうか之を御覽下さい。」

何たる立派な言葉であらう。天晴人後に落ちぬ軍人魂の所有者であることを遺憾なく表はして居る。一言一句悉く、紅に燃えてゐる。十分味はさせなければならぬ。此の時の水兵の態度、眉宇、語調等も十分想像させるがよい。

第三節(九十五頁十行まで)は水兵の母の手紙である。一人の可愛い我子を戰場に送つた老母の心のなやみ、戦時に於ける母としての崇高な決心が充實に現はれて居る。

「母はいかにも残念に思ひ候。何のために軍には御出でなされ候ぞ。一命をすてて君の御恩に報ゆるためには候はずや。」

何といふ悲壯の言葉であるかな。親として子を愛せぬものはない。我が子の無事の凱旋を希はないものはない。しかしながら此の母にはそれ以外にもつと大なるもの、強いものがあつた。それは即ち愛國心である。君國の下に盡さうといふ奉公心である。人情と義理！此の二元が激甚に葛藤したが、しかし遂に大義のために人情をすてて、最高の人道に活きたのである。實に大義のためには我が子を滅すといふ大道に徹した母といはなければならぬ。

「村の方々は朝に夕にいろ／＼とやさしく御世話下され、『一人の子が御國の爲軍に出でし事なれば定めて不自由なる事もあらん。何にても遠りよなく言へ。』と、親切におほせ下され候。母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、此の胸は張裂くるばかりにて候。八幡様に日参し候も、そなたがあつばれなるてがらを立て候やうとの心願に候。」

戦の子をいだす家の人に對する村民の美しい至情が溢れて居る。此の至情に對しても、我が子の天晴な功名を希つて居る母の切々の情が高度に動いて居る。

「母も人間なれば、我が子にくしとはつゆ思ひ申さず。いかばかりの思にて此の手紙をしたゝめしか、よく／＼御察し下されたく候。」

此の言や真に吐血の言である。大尉の泣くのは無論・讀者も亦泣かざるを得ない。

第四節(九十七頁九行まで)は大尉の謝罪と訓諭である。大尉がわるかへたと云つて詫びる所、縷々と諭して水兵を慰安する所、其の中に戦があつたら互に目ざましく働かうと約する所は、全く高度の感激の表現である。

「水兵は頭を下げて聞いてゐたが、やがて手を舉げて敬禮して、につこゝと笑つて立去つた。」先に「それは餘りのお言葉です」といつて、大尉の誤解に激した水兵が、今は大尉の心からのやさしい言葉に、その怒の情が全く消えて、感謝と喜悅と安心とに満ち、莞爾と笑つて立ち去る所は實に美しくまた貴い結論である。

以上の諸點は十分感味させたい。

區分

第一時 全體の通讀。

第二時 第一・二節(九十四頁二行まで)を授く。

第三時 第三節(九十五頁十行まで)を授く。

第四時 第四節(九十七頁九行まで)を授く。

第五時 練習・應用。

教具

日清の戰地圖

教法

第一時

▽全文の通讀。

本時に於ては、先づ目的を指示し次に各自をして全文を一讀させて其の大意を捉へさせ、また新文字及び主要の語句等について授けた後、時間のあるだけ、指名してまた自由に讀ませて讀み方の練習を行ふ。

第二時

▽第一、二節を授く。

- 一、各自をして自由に一二回讀ませる。
- 二、質疑に應答する。また主要の語句等について問答する。
- 三、内容につき問答する。

各自をしてよく意味をとつて一讀させる—内容について問答して、其の精神のある所を十分感味させる

四、誦讀の練習を行ふ。

各自自由に—また指名して。

五、書取

戰役 軍艦 大尉 女々しいふるまひ 帝國の恥 命を惜む 御覽下さい：等。

〔注意〕 第二・三・四時は第一時に準じて授く。而して内容吟味の際は「文章」の部を参照し、其の生命のある所を十分味得させる。また「願」、「精」、「職」等は新字であるから、之が筆順を知らしめることも忘れないやうにする。

第五時

△練習、應用

一、全文を自由に一讀させる。

二、質疑に應答する。また主要の語句等につき問答する。

三、内容につき問答して、其の精神のある所を一層深く感味させる。

四、文の表現法につき問答する。

五、練習應用。

(一) 次の語句をつかつて短文を作らさせる。

女々しいふるまひ 面目とも思はず 餘りなお言葉です 不自由 遠りよなく

ふがひなき つゆ思ひ申さず 目ざましい働

(二) 次の文語を口語になほして見よ。

かく別の働なかりきとのこと 御出でなされ候ぞ 君の御恩に報ゆるためには候はずや

不自由な事もあらん あつばれなるてがらを立て候やうとの心願に候 いかばかりの思

にて よく／＼御察し下されたく候

教授上の注意

一、本課に於ける中心思想は水兵の母の手紙がそれであるから、其の考で取扱はなければならぬ。

二、本課を授ける前に、日清戦争の原因と結末とにつき極く簡明に話し、然後本教材の教授にはいるのがよい。また、教授が終つた後、其の後に於ける高千穂艦の戦争振りを簡短に補説することも無用ではない。

三、本文中水兵の母の手紙は候體になつて居るから、之を口語に譯する力を附與してやることも

忘れてはならない。

四、本課に於て、水兵はこの人、其の母は何といふ名であるか。また某大尉とは誰か、今はどうしてゐるか。といふやうな詮議立は無用だと考へて居る。教科書が「一水兵」としたのも、「一大尉」としたのも、そこに意があるのである。

備考

海嘯日録

(前略)八月十四日に至り本隊及び秋津洲長直路に歸り我が高千穂及び吉野浪速代るべく偵察の任務をとり此處に留まること旬日この間一つの記すべき事なく將士皆無聊に苦みぬ。

一日余フオール(艦の前部にして水兵の居なり)に行かむとして藥劑室の傍らを通ぐる時余が部下の年若き一水兵片隅に坐して女子の筆と覺しき手紙を前に置き愁然涙を含むを見とめぬ。余暫時その背後に立ちて熟々眺め居りしが其の女々しき舉動に心激して思はずも聲荒く、

「未練者命惜しきか但し妻子に心遣るか、男兒軍籍に入りて千載一遇の戦に出づるは武人の本懐と喜ぶべきに見苦しきその涙は何事ぞ。兵士の耻は士官の耻、士官の耻は艦長の耻と知らざるか。」

彼は驚きて起り。起つて涙を拂ひ涼しき眼に余を屹と立ちまもりつゝ再び愁然と打萎れぬ。

「未練者とは餘りなり。某まだ妻なければもとより子なし。數ならねども日本の兵士、命惜しとて泣くべきか願くばこの文御覽せよ。」

言ひ終つて手にせる一通を恭しく差し出せり。余は之を受取りて開き見るに筆跡いと拙く文章も解し難き所まゝあれどもその意義は實に左の如くなりしなり。

(前略)「聞けばおん身は豊島の戦にもおん出なく、また此度威海衛とやらにても別段手柄をなされしとも見受けず。さてもく言ひがひなき事と母は唯々残念に御座候。何のため軍にはおん出なされ候や一命を捨つるが君に報ゆる軍人の役目かと覺え候上に又心苦しきは村の方々朝に夕にいろく憂しくなされ「たゞ一人の御息は國の爲め軍に出られ候なれば留守中不自由なる事あらば何にても遠慮なく被仰よ」との御深切、その方々の顔見る度にも、そなたの腑甲斐なき事尙々思ひ出されて面目なく母の胸は張り裂く許りに御座候。鎮守の神様に日參致候もそなたが無事の歸國を祈るにては無く「天晴なる討死を遂げさせ給へ」との心願に御座候。さればとて母も人間に候へば我子情しとは露存せずいか許りの思ひしてこの手紙認め候やよく御推察ありて御覺悟の程頼み入候。(下略)

言々皆肺腑より出て一語は一語よりも切にして餘はほとんど讀むに堪えず母として我子に向ひ「死ねよと教ふる其の胸中を察すれば豈啻に吐血呑劍の苦のみならずや。嗚呼いかなれば我が同胞斯くまでに報國の一念堅きぞ。鬼神もしあらば亦其の壯烈に泣きやせむ。況んや人として子として焉んぞよく涙なきを得むや。泣くべし泣くべし涙の限り泣き盡すとも誰かこれを未練と笑はん。叱りし我今はなかくにそら恥しく「定めし元は由緒ある武士の血なるべし、その素性を試みむと彼が背を撫てつゝ「怒せよ。未練と言ひしは余が誤ぞ。子が母堂の赤心ただ感ずるの外なし。思ふに子は弓馬の家に生れしならむ。」

彼は頭を左右に打振りぬ。

「否某が家は世々鹿兒島の濱邊に在りて見る影もなき漁民なり。早く父に別れて兄弟も無く年老いし母のみ家に留めて出陣せしに見給へ親にまで「腑甲斐なし」と見られ口惜しさに覺えず落涙致せしなり。」

聞けばまことや他人事ならず余も亦帝都に母を遣しまゐらせたり。さらぬだに多涙多恨の我最早この上きくに忍びず俄にその言葉を遮り慰撫して曰く、

「口惜しと思ふは理ながら海軍は陸上の戦の如く獨り進みて功名せむ事思ひもよらず艦長を頭とし兵士を手足とし一艦一人となりて戦ふなれば能く其の職務を執り、騒がず懼れず分を守りて飽まで號令に従ふこそ水兵たる者の役目なれ。いか程討死せむと思はばとて運命盡すば彈丸雨飛の中にも身は完からん。子等のみかは艦長始め諸士官とて豊島の合戦に出會はざりし遺憾は

言葉に盡されれどもこれも天なり時なり己を顧みて疚しからずば誰に對して何をか愧づべき徒らに死を急ぎて輕々しき舉動をなすは男子の取る所にあらず遠からず一大快戦も有るべければ其折こそ將校兵士協心同力して目覺しき戦をなし高千穂の名を世に知らせん。決して己れ一人功をむさばらんとして一致の力を破る勿れ。よくこの理を細密に認めて母に贈り以てその心を安んぜしめよ。」

彼は頭を低れて唯々として聞き了りしが、やがて右手を擧げ敬禮して欣然として立ち去れり。試みに萬國古今の歴史を續き見よ。弓矢の家に育ちし六尺の男子、歴世君恩に浴しながら一朝事あれば則忠義を捨て利慾に走り尙且つ兩刀を腰にして意氣揚々たるもの往々あり。されば鐵の血痕まだ乾かずして億萬の武士が忠骨尙香しき元祿の時だにも赤穂の義士四十七人その主が仇を報ゆれば天下之を異數となし感嘆の極殆んど人間視せざるに至る。身を抛つて忠を完ふするの難き事知るべきなり。何ぞ料らん明治の今日征清の役に土民漁夫の子盡くこれ忠勇無雙の士ならんとは。而してその父母亦皆武林唯七が母に耻づる者なし。余幼時屢々昔氣貫の老人が武士道廢れて忠魂義膽の觀るべからざるを嘆ぜしと聞けり。もしこれにかの兵士が母の書簡を示さば果して何の感かある。壯なるかな四千萬人が國家と興亡を共にせんとするの靈氣合して百鍊の鐵となり碎けず折れず又曲らず斯かる國民を背後に置きこの勇兵を用ひて戦ふ。勝敗の決言はずして知るべし。余は將に下の句を特筆大書して地下の祖先に誇らんとす。

曰く明治聖世の匹夫匹婦忠勇古の烈丈夫に愧ぢず。(下略)

第二十二 熱イ國々ノ人

要旨

形式上では新文字の読み方・書き方、難語句の意義、語法等につき知らしめて本文の讀解に習

熟させる。

内容上では、地球上の熱い國に於ける民族の生活状態、動植物の有様、氣候等につき知らしめるを以て要旨とする。

教材

一、文字

「幅」——布帛の廣さ二尺二寸あるものをいふ。轉じて布帛の兩邊具れものをいふ。漢・吳音共に「ブク」で、訓は「ハバ」等である。

「濼」——露多き義。轉じてあつくこまやかな義となる。慣習音は「ノウ」で、訓は「コシ」である

「法」——公平の義。また「オキテ」、「テホン」、「ノリ」の義とする。漢音は「ハフ」、吳音は「ホフ」で、訓は「オキテ」、「ノリ」、「テホン」等である。

「背」——せなかの義。即ち腹に反對せる部分をいふ。漢吳音共に「ハイ」で、訓は「セ」、「ウシロ」 「ソムク」等である。

「岡」——山の脊即ちヲカの義である。漢・吳音共に「カウ」で、訓は「ヲカ」等である。

「絶」——糸をたち切る義である。轉じて廣く「タユ」、「タツ」、「タユル」等の義となつた。漢音は「セツ」、「ゼチ」で、訓は「タツ」、「タユ」等である。

二、語句

「腰蓑」 蓑といふのは、茅又は菅などの莖・葉をあんで作つた一種の雨具である。で「腰蓑」といふのは腰にまとふ短いそれである。ボルネオ島のダヤック族の男子は此の種のを纏うて居る。「イロイロノ植物」 椰子・パンの木・ユーカリ・アカセダル・バオバフ・カウリマツ・火焰樹・アカシア等いろ／＼の種類がある。

「鱧」 爬虫類に属する動物で、體はとかげに似て居る。長大で硬い甲鱗を被り尾は側扁である。四肢は短く、趾間に蹼あつて游泳に適して居る。性兇暴で往々人畜を害する。概ね熱帯地方の大川又は沼澤に棲息して居る。長大のものは一丈餘に達する。

「沙漠」 アジア・アフリカの内地にある沙のみで、水草なき原野をいふ。

「オアシス」 湧泉地の意味で、渺茫たる荒野の中に於て青々たる常緑樹繁茂し、そこに清水が湧いてゐて好箇の休泊所である。だから沙漠旅行者は此の陰影を頼つて行く。

「駱駝」 偶蹄類中反芻類に属する獸である。性温順で力強く且使役に適して居る。また數日の渴を忍び得るから沙漠の旅行者には最も大切な獸である。

「交易」 物品と物品とをかへること。即ち我が有餘る物品を彼に與へて、彼より我が不足の物品を得ることである。

讀方に注意すべき語句

布ヌ 其處そこ 獸けもの 手傷てきず 負おウタ 背中せなか 食殺くひころす 釣針つりばし 清水しみづ

三、文章

第八卷には「寒い國々の人」といふのがのせてあつた。で本卷は之に對應して「熱い國々ノ人」といふのをのせたのである。

第一節は、所謂本文の總叙で、渾圓球上には極く寒い國も多くあるが、また極く熱い國も多くあつて、それ／＼に生活の状態が異つてゐると言ふことを言つたのである。

第二節は住民のまとふ着物について言つたので、幅の廣い布を肩から斜に纏うてゐる所、風呂敷のやうな布を真中に穴をあけ、其處に首を通して着てゐる所、腰蓑のやうな着物を着てゐる所、獸の皮などを腰にまいてゐる所など、ただに私共のと異つてゐるのみでなく、そのいかにも珍奇なのに感興が湧くのである。

第三節は住民の食物について記したのである。「中ニハ田畑モ作ラズ、家畜モカハズ、野生ノクダ物ヲ常食ニシテキル所モアル。」は私共の働いて食を得るのに反して、彼等は働かないで食を得るのである。即ち自然の恵みの手によつて養はれてゐるのである。

第四節は住家について記したのである。水中の家、樹上の家、簡短で、粗末であるが、いかに

も珍らしいものである。未開人の生活が色濃く見えて面白い。

第五節は動植物に於ける棲息状態や發育の有様について書いたのである。文中虎狩や鱒釣の記述は本當に讀者の感興をそゝり立てる。

第六節は沙漠について記したのである。「年中ホトンド雨が降ラナイカラ、大テイ草ヤ木ハ無クテ、見渡ス限リ、ノ原、岩ノ岡デアアル。タゞ所々ニオアシストイツテ、清水ガワキ、草ヤ木ガ青ト茂ツテキル所ガアル。」は一には自然の奇異に驚き一には自然の恩恵を想ふ所である。

第七節は沙漠の船即ち駱駝と隊商とについて記したのである。人類は地上のどんな所にも住んでゐて、生活のために自然と戦ひ、自然を巧みに利用してゐる所は中々に面白い。

要するに本文は熱帯地方に於ける住民の生活の状態、動植物の棲息、發育の有様、沙漠即ち地上の變態等について記述したのである。吾々の生活と對照して、本當に珍奇な生活である。また奇異な生活である。で子供等にはかうした珍奇な點、奇異な點を知得させて世界的見聞を擴充して行くべきである。

四、挿繪

百一頁にある挿繪は大沙漠の光景を描いたのである。人の群は隊商の一隊が今沙漠を横ぎつて行く所である。上部に別に描いてあるのは椰子の樹である。

區分

第一時 第一・二・三節(自九十七頁十行)を授く。

第二時 第四節(自九十九頁八行)を授く。

第三時 第五・六節(自百一頁二行)を授く。

第四時 全文の總括的復習及び應用。

教具

世界地圖 熱帯地方に於ける住民の服裝・住家等につき畫いた掛圖・大沙漠と隊商を描いた掛圖
其他動物・植物に關する寫眞等。

教法

第一時

一、先づ目的を告げて學習の動機を喚び起し、次に各自をして自由に一讀させる。

二、語句等の質疑に應答し、また教師よりも主要のそれ等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、後各自をして自由に二・三回讀ませる。

四、内容につき問答する。

衣食住につき、その珍奇な處、奇異な點を彼等の智識の程度の上から、また地理即ち自然の上

からよく知得させる。

五、読み方の練習を行ふ。

自由に——また指名して。

六、要點につき問答する。

衣服の有様につき——食物の有様につき——住家の有様につき。

七、次の漢字を書取らさせる。

熱イ國 着物 筒短 幅ノ廣イ布 獸ノ皮 穀類 野菜 肉類 家畜……等

第二時

▽第四節を授く。

第一時に準じて授く。但し書取らせる漢字は次の如くである。

濃イ緑ノ陰 棲ム 方法 一撃 急所 手傷ヲ負フ 背中 釣針 飛付ク

突殺ス……等。

第三時

▽第五・六節を授く

第一時に準じて授く。但し書取らせる漢字は次の如くである

様子 砂ノ原 岩ノ岡 清水 絶エズ 交易 賊ノ難ヲ防グ 隊商 食料
……等

第四時

▽全文の復習及び應用。

一、指名して各節毎に讀ませる。

二、質疑に答へ、また内容の要點につき問答する。

三、文の表現上につき問答する。

四、練習應用。

(一)次の項につき答へさせる(筆答又は口答)

着物ハ……………。
食料ハ……………。
熱イ國々ノ人ノ住家ハ……………。
沙漠ニナツテキル地方ハ……………。
駱駝ハ……………。

(二)次の語句をつかつて短文をかゝせる。

したがつて ながいてゐるところを 無くてならぬものは …… のもむりはない

教授上の注意

- 一、本課に於ては、熱い國々に於ける住民の衣食住につき、植物繁茂の有様につき、猛獸の棲息及び猛獸狩につき、沙漠地方の有様につき、隊商と駱駝等につき知らしめるを以て要點とする。約言せば熱帯地方に於ける住民の生活状態・動植物の棲息・發育の有様及び沙漠地方に於ける有様等につき知らしめるを其の主眼點として取扱つて行く。
- 二、本課を授けた後、前卷に習つた「寒い國々の人」の文章と對照して、其の相違する所を理解させるも無用でない。
- 三、本課を授けるとき、地圖は勿論、其他出来るだけ多くの寫真等を用意して示す所ありたい。また「イロイロノ植物」、「猛獸・毒蛇ナド」等については、それらの種類について適當に補説し、また沙漠地方に起るすこい現象等についても適當に附説する所あるがよい。
- 四、本課の第四時に於ける練習應用が、若し時間が足りないやうであつたら、其の中の(一)を家庭課題とする。其他本課を取扱ふ際、内容のみに偏重せず、形式上の練習も等閑に附せぬやう注意する。

第二十三 森

要旨

形式上では、新文字の讀み方・書き方、難語句の意義及び語法等につき知らしめて本文の讀解に習熟させる。

内容上では、夏の山に於ける緑濃き森林の清新味を、また木立の中に生えて居る様々の草花の愛らしさ美しさを味はさせるを以て要旨とする。

教材

一、文字

- 「競」——二人が強く言ひ争つてゐる義である。轉じて廣く争ひきをふ義となつた。漢音は「ケイ」、吳音は「ギヤウ」、慣習音は「キヤウ」で、訓は「キンフ」等である。
- 「敷」——うつてひろめる義である。漢・吳音共に「フ」で、訓は「シク」等である。
- 「絹」——きぬのことである。漢・吳音共に「ケン」で、訓は「キヌ」である。
- 「莖」——草木の幹の義である。後には専ら草のみに用ひるに至つた。漢音は「カウ」、吳音は「ギヤウ」で、訓は「クキ」等である。

二、語句

「椎」 殼斗科に屬する常磐木である。葉は卵形で尖り、粗い鋸齒があつて下面は灰白色である。果實は長楕圓形で尖り、囊狀の總苞に包まれて居る。木材は諸種の用に供せられ、樹皮は染料となる。

「ねむの木」 荳科に屬する木である。葉は羽狀複葉で對生し、夕方になるとしぼみ朝になると伸べる。花は夏に開き雄蕊が多くあつて下部に至つて一體をなして居る。果實は莢をなし種子は米粒の如くである。觀賞用として栽培され、木材も亦いろ／＼の用に供する。

「くわんざう」 百合科に屬する植物で、ヒメクワンザウ、ベニクワンザウ、ヤブクワンザウ(オニクワンザウ)等の種類がある。いづれも山野に自生し、花期はヒメクワンザウは四月頃で、ベニクワンザウ(花の色暗褐色)は七八月頃で、ヤブクワンザウも七八月頃である。

「つゆくさ」 鴨跖草科に屬する草で各地に自生する。葉は莖の毎節に互生し長楕圓狀卵形で通常鋭頭を有して居る。佛焰狀の苞は殆ど平滑で、花は三瓣の深綠色で、夏季に朝開いて晝萎む。染料に用ひる。

「讚美」 ほめる意。

讀み方に注意すべき語句

- 生氣せいき 繁しげき 木立こだち 老木らうぼく 根本こんぽん 木陰こかげ 木振きざり 絹絲きんいと 眼下がんか

三、文章

「緑の色を競へる繁しげき木立。」——清新の氣が満ち／＼て居る。

「一いきは高くそびえて、こするに雲もかゝるべき大杉の群。」——一種の威嚴を感じる。

「横にはびこりて、廣ひろき陰を作れる椎の老木。」——ほしほしまゝに威張つて居る彼の暴君のやうである。

「日光のさしたることなき木々の根本には、青あおきこけ一面に生ひて、毛織の敷物を敷けるに似たり。」——清楚な境地である。

「薄暗うすくらき木陰に茂れる山つばきは、つや／＼しく濃こき緑の葉の間に、小こさきこぶしの様なる實をかくしたり。」——可愛かわいい感じがする。

「木振きざりすなほに、のび／＼としたるはねむの木にて、絹絲をつかねたるが如ごとき花美しく……」——和わかな優しい感じがする。

「たくましくわんざうの花、しほらしきつゆくさの花、其他その他白しろき花、赤あかき花、黄きなる花、思おもひ思おもひに咲さきみだれたり。」——誠まことに美しい境地である。

「中なかにも見事みごとなるは山やまゆりなり。丈だけ高たかき莖こゝろに、五ごつも六むつも着ききたる大おほりんの花はなの、他ほかの花はなども

を眼下に見て咲きほこれる様……」——丁度此處に於ける花の王様のやうである。

「右を見ても左を見ても、目に入るものは青葉にて、其の間を分けて吹來る風の涼しさ。」——實に、氣持がする。

「どこともなく聞ゆるせみ、小鳥の聲。」——幽靜な境地を想起させる。

以上の諸點を十分感味させたい。

叙述上に於て、

「我は夏の森の靜かにして、生氣満ちくたるを愛す」

を始と終に置いたことは、一寸新しい形式である。是等の點も一寸話してやるがよい。たゞ此の總叙的一節が他の細叙の内容と照應しない憾みがある。それから

「どこともなく聞ゆるせみ、小鳥の聲、何れも夏の日の樂しさを讚美するが如し。」に於て「夏の日の樂しさを」の一句はどうも其の境地の表現に關係がないやうに思はれる。全然とは言はないが、慥に失敗の一句である。

區分

第一時 全文を授く。

第二時 練習及び應用。

教具

椎・山椿・ねむの木・くわんごうの花・つゆくさ・山ゆり等の繪畫・標本又は實物等。

教法

第一時

▽全文を授く。

- 一、先づ目的を告げて學習心を喚び起し、次に全體を自由に一讀させる。
- 二、語句上、語法上彼等の質疑に答へ、また教師よりも主要の語句、語法等につき問答する。
- 三、読み方を檢閲し、後彼等をして自由に二三回讀ませせる。
- 四、内容につき問答する。
森林の清新味——草花の愛らしさ、美しさ——蟬鳴く小鳥鳴く森林中の幽靜味……等。
- 五、読み方の練習。
個人的に——また自由に。

第二時

▽練習及び應用。

- 一、先づ指名して讀ませ次に質疑に應答する。

- 二、内容につき問答して一層深く感味させる。
- 三、練習應用。

(一)漢字の書取。

緑の色を競ふ繁き木立　こすゑに雲かゝる大杉の群　はびこりて廣き陰を作れる椎の老木　毛織の敷物　濃き緑の葉　絹絲　様々の草生ひ茂る　草の莖　生氣に満つる夏の木立……等。

(二)次の文語を口語に直させる。

青きこけ一面に生ひて、毛織の敷物を敷けるに似たり　ねむの木の花は絹絲をつかねたるが如し。　花の形・葉の形・見るからに涼しげなり　花の王なるべし……等。

(三)次の語句をつかつて短文をかゝしめる。
 競へる　そびえて　はびこりて　つやくしく　涼しげ　たくましく　満ち満ちたる

教授上の注意

一、本文は文語體でかいてあるから、之を口語に譯する力を養ふことも忘れてはならない。練習上からして嚴密に口語に譯させてもよい。併しかうすることを以て本體とはしたくない。どこ

どこまでも讀むと同時に譯して行くを以て本體とする。

二、本文中に於ける「満ち／＼たる」「つやくしく」「のび／＼したる」「たくましく」「しほらしき」等の語については、特に注意し、之が職能を明かにすると共に、また之が用法にも習熟させる。

三、本文を授ける前、可能の地に於ては、可成兒童をこの如き現地に引率して、其の實境地に接觸させ、然る後教授にはいることにする。それは此の種の材料に於ては、さうした實經驗が背後にあるのを尊ぶからである。

四、本文の内容は味ふを以て主眼とし、樹木や草花について、理科的に説明することをさけて行きたい。

第二十四 模様と色

要旨

形式上では、難語句の意義、語法等について知らしめて本文の讀解に習熟させる。内容上では、私達の着物を始め縫物・器物・彫物・焼物・建築物等に用ひてある模様は、いづれも動植物又は自然物等を工夫して美化したものであることを知らしめ、且之に對する趣味心と創作

心とを鼓舞するを以て要旨とする。

教材

一、語句

「模様」 織物・縫物・彫物などに作り出す種々の形象をいふ。即ち動植物又は自然物等に意匠を加へ、裝飾の目的を以て之を藝術化又は美化した形象をいふのである。

「生返つたやうな色」 今まで夏の炎熱のために萎れてゐた草木が、雨のために生々とした姿になつたのをいふ。

「虹が出た。虹が出た。空を衣裳に見立てたら云々」 美しい虹が大空に現はれた。今假に大空を一枚の着物と見立てたならば、七色に染め分けた、いかにもはでなだんだら模様だ。」といふ意味。「三原色」 赤・青・黄の三色をいふ。

「散らし模様」 或る一定の形象又は形式の下になる模様でなく、散らばつた不定の模様をいふ。「直線や曲線を組合はせても云々」 模様即ち關係を分類すると大體次の七種になる。

- (一)幾何文
 - (甲)純正幾何文
 - (1)直線系——麻葉・龜甲菱・卍等
 - (2)曲線系——渦輪・輪違・立涌等
 - (3)混用系——七寶等

(乙)便化幾何文——多く植物を何化して幾何的に構圖配列せるもの。

(二)動物文——麒麟・鳳・龜・龍等の便化したるもの。

(三)植物文——各種草木の葉・花等の便化したもの。

(四)自然物文——山・水・雲・雪・星・虹等の便化したもの。

(五)文字文——喜・福・壽等の文字を便化したもの。

(六)徽號文——或意味を表する形を文様としたもの(二十文架等)

(七)事蹟文——或る事蹟を表はしたもの(神話・童話等)

讀み方に注意すべき語句

生返つたやうな 寄掛つて 一筆 色圖 波形 いつの間にか

二、文

本文は本當にいゝ文章である。

本文の構想は一兒童が雨後に於ける地上の天上の美しい色の直觀からして、いろ／＼の模様の構成を想起し、それに色彩を施すことによつて人の周圍の美化されることを想像し、さうしてあるうちに、ふと天上をながめたことによつて、深い冥想からさめたといふことになつて居る。餘り作り過ぎてゐるぢやないかといへば言はれるけれども、現實から想像の世界へ入り、想像から現實へかへる所は、いかにも自然(心理の)である。舊讀本に於ける此の記述振よりは遙かに面白

く出来て居る。左に叙述上面白い點二三をあげて言つて見よう。

「夕立がからりとはれて……庭の木も草も急に生返つたやうな色を見せて、こゝかしこの水たまりに、いろ／＼の美しい影をうつしてゐます。」——雨後の地上に於ける清新な景致をよく捉へてある。

「虹が出た。虹が出た。空を衣裳に見立てたら、七つの色に染分けた、だんだら模様、はで模様。」——は大きな歌、美しい歌である。而して之を男の子が歌つたとしたなら、餘りふさはしくないが、女の子がかはい、聲で歌つたといふ所にふさはしさと面白味がある。

「東の空に大きな虹が出ました。八幡様の森から學校の屋根へ、一すぢの美しい橋がかゝりました。まるでいろ／＼の繪の具で、一筆づつ刷いたやうです。あれを見てゐると、此の間圖畫の時間に、三原色でかいた色圖を思ひ出します。」——何と雄大な天上の美觀であるまいか。而してこれを色圖と結びつけた所は、やがて自然の風物を美化せんとする藝術心のそそれである。

「あゝ、虹が薄らいで行きます。あの下に切れ／＼に浮いてゐる雲の美しいこと。今沈んで行く夕日の光を受けて、金のへりをとつたやうに見えます。虹がだんだら模様なら、それも青い空の地に染出した散らし模様でせう。」——七色の色美しい虹！落ちる夕日に色彩る雲の切れ！實に天上の壯美である。之を衣裳の模様に擬うた所は、前同様に自然物を意匠化せんとする藝術

の心のそそれである。

「さう思つて見ると、屋根のかはらの波形に並んでゐるのも、水たまりにうつつてゐる影も、すぐいろ／＼の模様になりさうです。」——自然の風物をそれからそれと捉へて之を模様化して行かうとする所に藝術心のなやめがあつて面白い。

「草や木や、花や鳥などの形を使つても、直線や曲線を組合はせても、數限りなく模様が出来る」と聞きましたが全くさうです。」——自然物や自然現象は數限りなく多くある。従つて之を模様化せんとすれば、これもまた無限である。こゝは實に創造の無限を語つたのである。

「此の數限りのない模様の様々の色でいろどれば、ほんたうにどんな美しいものも出来ませう。考へてみると、私達の着物や帯でも、繪本や帳面でも、皆それ／＼模様や色の工夫のしてないものはありません。此の模様の色で私達のまはりがどんなに美しくされてゐる事でせう。」——こゝは單に自然物を模様化するだけでなく、それに光即ち色をつけることによつて、一層美化されることを語つたのである。即ち形と色の抱擁によつて、人の周邊が本當に美化されることを言つたのである。前節と共に本文に於ける中心點である。

以上の諸點は十分理解させまた味得させる。

三、挿畫

上圖右方から

麻の葉(直線)

渦卷(曲線)

ウマゴヤシの葉(植物)

蓼科に屬する植物。

下圖右方から

松の木(植物)

百合(植物)

波に千鳥(水と鳥)

区分

第一時 第一・二節(自百五頁八行)を授く。

第二時 第三・四節(自百七頁十行)を授く。

第三時 全文の總括的練習及び應用。

教具

挿畫にある模様及び之に色を施した掛圖。麻・馬肥・蓼科の植物(ネバリタデ等)百合等の實物又は標本

教法

第一時

△第一・二節を授く。

一、先づ目的を指示し、後各自をして自由に一讀させる。

二、語句、語法等につき彼等の質疑に應答し、また教師よりも主要の語句、語法等につき問答する。

三、讀み方を檢閲して、後各自をして自由に二三回讀ませる。

四、内容につき問答する。

夕立後に於ける庭の草木の生々した姿が此處彼處の水溜にうつてゐる美しい影——美しい虹の歌——美しい天上の虹——美しい村雲の影——それ等に對應して動く子供の美しい想像等(挿畫と交渉して)

五、誦讀の練習。

自由に——また指名して。

第二時

△第三・四節を授く。

第一時に準じて授く。

第三時

△全文の復習及び應用。

一、復習。

各節を指名して讀ませる——質疑に應答する——内容につき問答する——文の表現法(心理の

それからそれとうつつて行く所も)につき問答する。

二、練習應用。

(一) 語句の書取。

日影 庭の木 生返つた色 美しい影 模様 圖畫 色圖 雲の美 屋根
のかはらの波形 私達 繪本 帳面 空を仰ぐ……等。

(二) 次の語句の意味をかゝせる。

日影がはなやかにさして来る 虹が出た、虹が出た空を衣裳に見立てたら、七つの色に染
分けた、だんたら模様、はで模様、 色圖 曲線 帳面……等。

教授上の注意

一、本課に於ては、一兒童がその自然の景物に對して表現した、その表現を通して私共の用ひて
ゐる織物・縫物・器物等に於ける諸種の模様は、動植物や自然現象等に工夫を加へて美化したも
のであることを知らしめ、また此の模様に色彩を加へることによつて、一層美化されることを
知らしめ、傍ら彼等をして之に對する趣味と自ら意匠せんとする創作心を作興して行くといふ
考で取扱つて行く。

二、本課に於ける挿繪は、本文中に於ける「草や木や花や鳥などの形を使つても、直線や曲線を
組合はせても數限りなく云々」の句に對して、具體的の説明用に描いたものであるから、其の
考で使用して行く。

三、本文の語句中、「いろいろの美しい影をうつして」「色圖」「散らし模様」「草や木や花や鳥な
どの形」「直線や曲線を組合はせても」等は例示して説明する必要がある。だから豫め是等に屬
するものを用意して置くことが遺漏なき態度である。

四、本文に於て作者の表現法、殊に作者の想像がそれからそれへと移つて行く所は中々に面白い。
でかうした點をも知らしめることは面白いことでもあり、また必要なことでもある。

五、本課に於ては、模様の種々と其の模様に色彩することによつて一層美化せられるといふこと
を知らしめるのが大切な要求にもなつてゐるから、兒童をして家庭にあるそれ等のものに屬す
る物の内で、可能のものは學校へもつて來らしめ、かくしていろいろのそれ等に接觸させるこ
とも賢い方法である。

第二十五 貯 金

要 旨

形式上では、新文字の讀み方・書き方、難語句の意味、語法等について知らしめて本文の讀解に習

熟させる。

内容上では、貯金の必要及び其の方法につき知らしめて、勤儉貯蓄の精神を養ふを以て其の要旨とする。

教材

一、文字

「貯」——貨物を積み藏する義である。漢音は「チヨ」、吳音は「ト」で、訓は「タクハフ」等である。

「辨」——判ち別つ義。故に刀をかく。轉じてワキマへ・知ル等の義となつた。漢音は「ハン」、吳音は「ベン」で、訓は「ワカツ」等である。

「榮」——本義は桐の木の義である。英に通じてハナの義となり、更に轉じてサカエシゲル意義となつた。

「普」——日の上に雲が並び覆つて日に光なき義である。溥に假借して博くあまねきの義となつた。漢音は「ホ」、吳音は「フ」で、訓は「アマネシ」等である。

二、語句

「元手」 商業を営むための基本のかね、もと金。資本

「支辨」 支拂に同じ。

「郵便貯金」 郵便局に貯金すること。此の貯金は政府で管掌するのであるから、支拂不能を生ずることがない、最も安全な貯蓄法である。

「銀行」 金銭の餘裕ある者から之を取つて不足する者に致し、貸借の媒介を營業とするものをいふ。銀行に於て普通行ふ事は、預金・手形割引及び貸付等とする。

「貯金臺紙」 一錢・二錢・三錢の三種ある。各々其の價に相當する切手を貼付し得る様に劃線を引き、其の劃内毎に一枚づつ如上の切手を貼り、終つたら之を郵便局に預入れるものとする。

「普通ノ銀行」 貯蓄銀行のやうに特殊の目的を以て設けられたものでなく、銀行の普通の業務を行ふ銀行をいふのである。

「貯蓄銀行」 一種の銀行である。公衆の貯金の便を計る爲の信用機關で、複利の方法によつて公衆の零碎な貯蓄金を預ることを營業とする。

「通帳」 預金者と郵便局若しくは銀行との間に金銭授受の都度、後の證として其の金額を記し置く帳面。

「タダシ」 本文に附屬して其の例外又は或條件を説き始める場合に用ひる接頭語。

読み方に注意すべき語句

金高 金 元手 貯金臺紙 通帳 平生

三、文章

文章の組立は次のやうになつて居る。

- 第一節——貯金の必要につき。〔郵便貯金につき。〕
- 第二節——貯金の方法につき。〔銀行預金につき。〕
- 第三節——貯金臺紙につき。
- 第四節——銀行の種類と預金につき。
- 第五節——預金と通帳につき。
- 第六節——貯金に對する心得。

貯金

以上の諸項につき、部分的にまた總合的に其の精神のある所を確實に識得させなければならぬ

區分

- 第一時 第一・二・三節(自百九頁八行)を授く。
- 第二時 第四・五・六節(自百十一頁八行)を授く。
- 第三時 全文の復習及び應用。

教具

通帳 貯金臺紙 預金増殖の一覽表等

教法

第一時

△第一・二・三節を授く。

- 一、目的を掲げ、各自をして自由に一讀させる。
- 二、質疑に應答し、また主要の語句、語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、後各自をして自由に二三回讀ませる。
- 四、内容につき吟味する。

貯金の必要——貯金の方法——貯金臺紙……等につき。

五、誦讀の練習

自由にまた指名して、

六、語句の書取

- 貯金 積立つ 餘程 必需品 家業ノ元手 費用ノ支辨 郵便貯金 銀行預金
- 事業 運轉 國家ノ繁榮 郵便切手 貯金臺紙 郵便局 同一種類……等。
- 七、各節の要點につき問答する。

第二時

△第四・五・六節を授く

第一時に準じて授く。但し書取らせる漢字は次の如くである。

銀行預金 普通の銀行 拾圓 通帳 保存 貯金スルト否トハ其ノ人ノ心掛ニヨル
收入ノ多少 社會ノ爲 貯金ノ必要 費用ヲ惜ム……等。

第三時

△全文の復習及び應用。

一、復習

各節毎に指名して讀ませる——質疑に應答する——内容の要點につき問答する——よく意味を
とつて自由に一・二回讀ませる——文の組立につき問答する。

二、練習應用

(一) 次の問を書いて答へさせる。

貯金ヲナストキハ……………。
貯金ヲナサンニハ……………。
貯金臺紙トハ……………。
貯金ヲナスニハ……………。

(二) 次の文語を口語に直させる。

他人ノ助ヲ受ケズシテ其ノ費用ヲ支辨スルコトヲ得ベシ	貯金ノ方法ハ種々アレドモ		
利子モ次第二加ルノミナラズ	國家ノ繁榮ヲ助クベシ	一度ニ拾錢以上ノ貯金ヲナス	
コト能ハザル者ノタメニハ	貯金セントスル金錢ニテ	郵便貯金トスルナリ	大切
ニ保存スベシ	成ルベク多ク貯ヘンコトヲ勉ムベシ	必要ナル費用マデモ惜シムガ如	
キハイヤシムベキ事ナリ			

教授上の注意

一、貯金は個人的生活の上から言つても、亦國家的生活の上から言つても大切なものである。従つて本教材は其の考で取扱つて行く。

二、本文に於ける語句中

必需品モ買フコトヲ得ベシ——二三の例を示す。

他ノ場合ニモ——二三の例を示す。

貯金ノ方法ハ種々アレドモ——二三の場合を示す。

預金ハ種々ノ事業ニ——二三の例を示す。

無用ノ費用——二三の例を示す。

必要ナル費用——二三の例を示す。

といふ所ありたい。即ち是等抽象的の語句に對しては適當に例示して具體化して知らしめる。

三、本文は文語體であるから、之を口語に譯する力を附與することも怠つてはならない。

四、「一日ニ一錢・二錢ヅツニテモ積立ツル時ハ、五年・十年ノ後ニハ、餘程ノ金高トナル云々。」については一年を三百六十五日と假定し、又利子なきものと假定して、五年後、十年の後に於ける貯金の總額を計算させ、自己の經驗に訴へて此の語の内容を理解させることも面白い。併しこれは必ずしも讀本の時に限らない。寧ろ算術科と連絡して、事實問題として課することが適當である。併し其の結果に對して「尙之に利子を加へれば一層大となる云々。」と附言することを忘れてはならない。

五、語句の内容を明かにするために、その異同を比較させることも有効な方法である。例へば、

普通の銀行と貯蓄銀行 必要なる費用と無用なる費用 郵便局と銀行 郵便切手と貯

金臺紙

等について其の異同を比較させるが如きはそれである。

備考

郵便貯金及び銀行貯金

(一) 郵便貯金

貯金の機關は種々あるけれども最も正確安全で全國に普通してゐるものは郵便貯金である。郵便貯金は政府の掌るところであつて、全國に散在せる郵便局所に於て其の取扱をする。而して其の趣旨とする所は主として零碎な金錢を安全に貯蓄利殖させ、以て國民の勤儉貯蓄の美風を涵養するのである。

郵便貯金の一口の預け金は十錢以上で普通の預け人は貯金總額二千圓を超過する事は出来ないけれども、公共團體・社寺・學校、營利を目的としない法人若くは團體等は其の總額に制限がない。

郵便貯金には其の預入の翌日より拂戻の前月まで勅令を以て定められた歩合に依つて利子を附するもので此の利子は毎年三月三十一日を區切り、之を元金に加へられる。

始めて郵便貯金の預入をなさうとするときは、所定の貯金申込書に記名調印(代印者を設けることを得)した上現金を添へて郵便局所に差出す。さうすると直ちに預入金を記入した通帳を交附される。かくて二度目からは其の通帳に現金を添へて差出し、通帳に預入金の記入を受くるのみで、他に何等の手續をも要しない。

兒童で一時に十錢以上の郵便貯金をやること能はぬものは、郵便切手に依りて貯金するの便がある。其の郵便切手に依つて貯金の預入をしようとする者は、郵便局所より郵便切手貯金臺紙の交附を受け、同一種類の郵便切手を相當欄に貼附し終つた後に之を郵便局所に差出す。此の如くして、現金に依る預入と同じく預入金として通帳に記入せられる。但し郵便切手に依る預入は一人同一月内一圓を超ゆることは出来ない。

郵便貯金の預け人は何時でも貯金の拂戻を請求し得られる。その方法には通常拂戻(一部拂戻・全部拂戻)特別拂戻(即時拂局待拂)等の別がある。

(二) 銀行預金

銀行といふのは金錢の餘裕ある者から之を取つて不足する者に致すといふ金錢貸借の媒介を營む一種の會社をいふ。

銀行には普通の銀行と貯蓄銀行とある。貯蓄銀行は公衆の貯金の便を計るといふ特殊の目的を有する一種の銀行である。貯蓄銀行に於ける預金の種類には貯蓄預金・小口預金・定期預金・當座預金等がある。左にそれ等の預金の手續について其の大體を記さう。

(1) 貯蓄預金 一口拾錢以上 利子年五分四厘

此の預金は一日に幾度するも隨意である。始めて預入する時には印形と金員とを持って行く。さうすると銀行の方で手續をして通帳を渡してくれる。之を大切に保管して置く。預金拂戻の節は通帳に拂戻すだけの金高を記入し、捺印して持つて行くか、又は通帳と印形とを持つて行く。さうすれば銀行の方で手續をして渡してくれる。利子は年兩度(六月十二月)に記入して元金の内へくみ入れる。だから複利の計算になる。

(2) 小口當座預金 一口五圓以上 百圓につき利子日歩壹錢壹厘

(3) 定期預金 一口五拾圓以上 年利五分七厘

(4) 當座預金 一口拾圓以上 百圓につき利子日歩七厘

以上預金の預入又は拂戻の手續は前記貯蓄預金の場合と略ぼ同様である。預入人の氏名は銀行の規定により決して他人に洩すことがない。

第二十六星の話

要旨

形式上では新文字の読み方・書き方、難語句の意義、語法等につき知らしめ本文の讀解に習熟させる。

内容上では兄弟の物語を通じて、北極星及び北斗七星の見方、之に纏はる面白き傳説等を知らしめ、天界に於ける現象の一端を會得させるを以て其の要旨とする。

教材

一、文字

「實」——家の中に玉や貝(財)のある義である。漢・吳音共に「ハウ」で、訓は「タカラ」である。

「寢」——病氣のためにねて居る義である。後一般にねる義となる。漢・吳音共に「シン」で、訓は

「イヌ」・「ヤスム」等である。

「係」——物を結束する義。轉じてかかはりつながる義となる。漢音は「ケイ」、吳音は「カイ」で、

訓は「ツナグ」・「カカル」・「カカハル」等である。

「迷」——まよふことの義である。漢音は「ベイ」、吳音は「メイ」で、訓は「マヨフ」等である。

「傍」——人の側近く侍する義である。漢音は「ハウ」、吳音は「バウ」で、訓は「ソバ」・「カタハラ」

「ツキ」等である。

「覺」——眞理を見得する義である。轉じて悟了した人(聖賢又は佛陀)神靈等の義となつた。漢・

吳音は「カク」で、訓は「サトリ」である。

「罪」——本義は魚を捕へる竹の網。漢音は「サイ」、吳音は「ザイ」で、訓は「ツミ」である。

「謝」——辭し去る義である。轉じて絶つ、退く、禮をのぶ、罪を詫ぶ等の義となつた。漢音は「シャ」、吳音は「ジャ」で、訓は「コトワル」等である。

二、語句

「星」 晴夜天空に輝いて見える天體で・恒星・遊星・慧星・彗星等の別がある。光度に應じて等級を分ち、肉眼で見える最小のものを六等とし最大のものを一等とする。

「満天の星」 空一ぱいの星

「ちりばめ」 彫刻の中に珠玉などをこめることをいふ。

「位置」 場所又は所在。

「北極星」 地球の北極に最も近く輝いてゐる星である。即ち北極を去る一度十三分の所に位置して居る。

「北斗七星」 大熊星に同じ。北天の星座で、肉眼で見えるものでも百五十もあるが、其の中大なのが七つあつて、之をつゞけると斗状をなしてゐるから、古來から之を北斗星といつて居る。七星の中斗柄に當る星を破軍星ともいひ、古來劍の形を以て象徴されて居る。支那の陰陽家は此の星によつて占斷したり、豫言したりするといふ。

「親身」 肉親・骨肉・血縁に同じ。

「其の夜の夢に入れり」 その夜の眠りについた。又は寢床に入つた。

「讀み方につき注意すべき語句」

夕飯 ゆふは 目當 めあて 一群 いっぐん 眞上 まうへ 小熊座 こぐまざ 大熊座 おほぐまざ 狩人 かうじん 親身 しんみ

三、文章

此の文章は地の文が文語體で、會話が口語體で書いてある。敢てわるいといふ譯ではないが、全部口語體であつた方がよかつた。文語體を讀む力を養ふとしても、強ひてかうした文章にまたなければならぬといふこともない。

「信吉の家にては、夕飯後庭先に涼み臺を出して、家内一同涼みむたり。月はまだ出でざれども空よく晴れて、満天の星は寶石をちりばめたるが如し。」

これは一篇の總敘である。こゝでは晴夜に星輝く美しいみ空の有様をよく想起させる。

「にいさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、少しも動かないのですか。」

「さうだ。動かないのだ。しかし地球が廻るために、我々の目には動くやうに見える。どの星かを見おぼえておいて御覽、寝る頃にはもう位置が變つて見えるから。」

この敘述は科學的に見れば正しいとはいへない。が併し常識的に、また子供に對してといふ上からして之で満足してよい。こゝでは此の會話をとほして「大體星は動かない。が併し吾等のすむ

地球が廻轉することによつて、其の位置が變ずる。」といふことをよく理解させる。

「それでも航海する人などが、よく星を見て船の位置をはかるといふではありませんか。星がそんな位置の變るものなら、目當にならないでせう。」

「いや、何月何日の何時には、何處に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、はかられない事はない。それにたくさんの星の中に、一つだけ年中ほとんど位置の變らないのがあるから、誠に都合がよいのだ。」

この會話をとほして、「學問上では何星が何月何日の何時には何處に位置してゐるかといふことがちやんとはかつて分つて居る。」といふことを承知させ、また無数の多くの星の中で、唯一つ年中位置の變らない星がある。」といふことを告げて、それを知らんとする動機をそつて置くがよい。

「それは何といふ星ですか。」

「北極星といふ星だ。」

北極星！これがこの課に於て知らなければならない星の一に屬するのである。即ち之を知らさうがためのこの文章なのである。

「でもあんなにたくさんある星ですもの、それを見附けるのに大變でせう。」

「それにはまた都合のよい事がある。何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、いつで

も北極星の位置を知らせてくれるのだ。あれ御覽、向ふの杉林の上の所に、柄杓のやうな形になつて、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。」

こゝでは大熊星座即ち北斗七星について、掛圖又は挿畫と對照して、適當な補説と相俟つて十分理解させる。

「え、見えます。」

「あれが北斗七星だ。あの柄でない方の端にある二つの星を結び附けて、其の線を、柄杓の口の向いてゐる方へのばして行くと、今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりの所に、かなり大きい星があるだらう。あれが今話した北極星だ。北斗七星はいつでもあんな柄杓の形をしてゐる。北極星との關係も常に變らないから、あの星を本にして、すぐに北極星を見つける事が出来る。」

こゝは北極星を見出す方法の説明である。これが本文に於て一ばん大切な點なのである。掛圖又は挿畫と交渉して、しつかりと理解させなければならぬ。

「あ、あの一番高い杉の眞上の所にあるのが北極星でせう。」

「さうだ。それにあの星はいつも眞北にゐるから、あれを見附けさへすれば、道に迷つた時などにも、すぐ方角を知ることが出来る。」

こゝは北極星と實生活との關係とを言つたのである。で「道に迷つた時などにも、すぐ方角を知ることが出来る。」といふ外に、尙航海のときなどに於けることも補説して、一層其の關係を明かにするがよい。

「にいさんくあの北極星が柄杓の柄の先になつて、もう一つ、小さい北斗七星のやうなものが出来てゐますね。」

「あゝ、よく氣がついたね。並び方が全く似てゐるだらう。西洋では昔から、あの七つの星と其の近所の星を一しよにして、小熊の形を想像し、北斗七星とその近所の星を一しよにして大熊の形を想像して、それく小熊座・大熊座といふ名を附けてゐる云々。」

これは星座に關する一斑的知識を與へようといふ考へから物したのである。で其の考で取扱ふべきであらう。今日學者間にはれて居る星座は總計八十八あつて、一角獸・海豚・印度人・兎・狼・孔雀・琴・三角・時計・乙女等いろくの名がある。是等のことも一寸附説することも面白からう。

尙本文には小熊座と大熊座とに關して一つの面白い傳説がかいてあるが、之は面白く讀ませたらよい。其の他適切な問に對する適切な答や熱烈な研究心の生動等についても識得させる所あるがよい。

尙形式上から地の文と會話文の區別、會話の進行の形式等についても知らしめることも忘れて

はならない。

區分

- 第一時 自百十三頁始行至百十五頁三行迄を授く。
- 第二時 自百十五頁四行至百十七頁三行迄を授く。
- 第三時 自百十七頁四行至百十九頁一行迄を授く。
- 第四時 自百十九頁二行至百二十一頁八行迄を授く。
- 第五時 全體の復習及び應用。

教具

地球儀 地圖 挿畫の擴大圖 熊の形に描いた大熊座等。

教法

第一時

- 一、先づ目的を告げて學習心を喚起し、後各自をして自由に一・二回讀ませせる。
- 二、質疑に應答する。また主要の語句、語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、後各自をして自由に二・三回讀ませせる。

四、内容につき問答する。

星晨輝く美しい夜空——星とその位置の變動——北斗星及びその位置の不變等を會話を通して想起させ、また理解させる。

五、読み方の練習を行ふ。

指名して——また自由に。

六、書取

星 夕飯 涼み臺 満天 寶石 説明 地球が廻る 寝る 航海 何處……等。

(注意) 第二・三・四時は第一時に準じて授く。而して漢字等の書取を課することも忘れぬやうにする。

第五時

全體の復習及び應用。

一、各節毎に指名して讀ましめて其處に於ける彼等の質疑に答へ、また教師よりも主要の語句・語法等につき問答する。

二、内容につき問答する。(會話を通して知るべき事柄の其の要點を十分捕捉させる)

三、文の表現上につき問答する。(地の文と會話——會話の進行の形式等)

四、練習應用。

(一) 次の問に對し答へさせる。

(1) 北斗七星といふのは……………。

(2) 北極星を見出すには……………。

(二) 次の語句をつかつて短文をかゝせる。

満天 ちりばめたやうである 學問上 想像 謝して

五、話方の練習を行ふ。

小熊座と大熊座に關する傳説を話さしめる。

教授上の注意

一、本文は之を面白く讀んで行くうちに、前に文章部に記した要點をよく理解させる考で取扱つて行く。

二、本文に於ては、二人の對話中兄の答にその知るべき要素があるのだから、その考で取扱はなければならぬ。

三、本文を授ける前に、各兒童をして星輝く天空を觀察して置くやう約して置くがよい。或は讀

本が終つた後、夜分に適宜兒童を集めて、その實際につき指示する所あるもよい。教授は決して晝間に、屋根の下でのみ教へるに限つたものでない。夜分もまた無蓋の校外も教室の一部である。

四、本文に於ける語句中多少補説を要するものもあるから忘れぬやう注意する。

五、兎角家庭に於て、一般に兄は弟に親切に教へ、弟は兄によく服従して習ふといふ、態度が濃厚でない。之に對し本文の如きは本當によい手本である。でかうした點をも意識させることが無用でない。

備考

星

肉眼で見るとは、一點の光に過ぎざれども、その實は地球の如く、また月の如く大空に懸りて、回轉せる大なる球體なり。星に數種あり。

恒星 地球より見るに天と共に回轉して、其の相互の間には位置の變ずることなき星を云ふ。太陽も一つの恒星にて、他の恒星も太陽の如く天體の一團體の中心となり、自ら光を放ちて其の眷族を照すものなり。數は非常に多くして、肉眼にて見得べきものにも五千餘に及び、非常に視力の強き人には六千、通常人の一目に見得るは二千内外なり。これとても天球の一半のみを見得るに過ぎず。望遠鏡にて見得べきものは、殆んど一億に達し、その以外にまたいくばくあるを知らず。天空の廣大無邊、實に驚くべきにあらずや。

地球との距離は非常に大にして、光の速度は一秒時間に十八萬六千哩である。最近の恒星より地球に達する光も三年を要し、また或恒星よりは、三千五百年を費すといふ。

恆星の種類には其の光輝の度、並に距離の遠近によりて種々の等級に分つ。一等より六等までは、大抵肉眼にて見ることを得るなり。

北極星は地球より見て、常に北方に座して、其の位置變らざるを以て、天の北極を定むる標準となる星なり。古來北斗七星と稱し、天の北方に當り、七星柄杓の如き形をなして相並べる星なり。今この柄杓の頭端に當る二星を直線にて連結し、これを更にその直線の殆ど五倍する所迄延長したる點に一の明星あるべし。是れ即ち北極星(又極星)にして、その位置は天の北極を距る僅に一度の所にあり。故に肉眼にては少しも動かざる如くに見ゆ。さてこの北斗七星の第七なる星を破軍星と稱し、古來劍の形を以てその光を表はし、破軍の劍先(斗柄)などいひ、毎月運動し、十二箇月に十二支の方に移りて指す。この指せる方を陰陽家にては、萬事に利あらずとなせり。

星河は中秋の清夜、朦朧として銀白色の美麗なる一帯天空に横たはるもの即ち是れなり。幅十度より十五度に及ぶ。これを天河ともいふ。

遊星 地球より見て其の位置一定せざる星にして、太陽系に屬するもの、地球を始めとして、水星・金星・火星・木星・土星・天王星・海王星の八個あり。いづれも皆太陽の光を受け、これを反射するにより、始めて光明體となるものなり。

太陽系中、火星と木星との間に數多の小天體あり。これを小遊星といふ。その數今日までに知られたるもの五百あり。尙いくばくあるか測り難し。現に、最近の發見としては、我が東京天文臺の平山理學博士は、三十三年三月六日の夜、新たに小遊星を發見し、直ちに書を獨逸國キール天文學者クローイツ博士に送り、更に各國の天文臺へも報告したり。然るに諸國の天文學者は容易に信を置かざりしが、三十六年十二月二日、佛國のニュースの天文臺員の發見したる小遊星は、平山氏の發見したるものと同一なること明かになり、新星發見者の榮譽は平山氏に歸せり。平山氏は、これに東京と命名したり。

衛星 遊星に附屬せる小天體にて、太陽の光を反射す。地球に屬せる月の如き是なり。衛星の數は二十一あり。即ち地球に

一、火星に二、木星に五、土星に八、天王星に四、海王星に一なり。

彗星 常に見えず、時ありて出づる星にて形状種々なれど、皆濛氣ありて尾の状をなして掃の如し。太陽系に屬するものと見なすを得べけれど、その公轉の軌道は、他の遊星と同じからず。或は細長き橢圓のものあり、或は拋物線形なるあり、或は雙線形のものもあり。その軌道の橢圓にして最も長きものは、數萬年を距る後にあらざば、再び我が太陽系に復歸せざるべし。されど、三年・五年若しくは七十六年を週期として發現するものあり。

流星 よばひほしとも、ながれほしともいふ。夜間突然に大空を縱横に流るゝ火箭の如き小光體なり。流星は微細なる小天體なるが、その進行の際、地球の氣圈内に來り、引力により地球に向つて落下し、その際、非常なる大速度を以つて空氣を摩擦するによりて熱を發し、終には全く瓦斯體に變じ、光を引きて飛ぶが如く見ゆるなり。俗に火の玉と稱するもの、多くは流星の大なるものに外ならず。

卵石は流星の地上に達するものにして、その物體を檢する時は、主成分は鐵にして、必ずニッケル・珪石類を交ふ。

流星の雨又は星雨とて、毎年八月上旬には數多の流星、雨の如く落下す。これを八月群流星と稱す。此の外に、三十三年毎に一回出現する十一月群流星あり。蓋し流星の群は、ある軌道を以て、太陽の周圍を回轉するものなるが、中にはその軌道の地球の軌道と交はるものありて、兩軌道相交はる時、此の群流星の落下を見るなり。これを流星の雨と稱す。流星の落下する數は、非常に多きものにて、一年間全地球上に落下する總量は、十二萬噸にも達すべしといふ。(家庭百科學)

第二十七 加藤清正

要旨

形式上では、新文字の讀み方・書き方、難語句の意義及び語法等につき知らしめて韻文の讀解

に習熟させる。

内容上では、此の韻文をとほして、加藤清正の義勇の活動、威風凜々たる武者振を深く感味させる。

教材

一、文字

「紋」——物の面にある斑紋・紋理の義である。漢音は「ブン」、吳音は「モン」で、訓は「アヤ」等である。

「救」——惡を戒め止める義。轉じてタスクエスクフ義となる。漢音は「キウ」、吳音は「ク」で、訓は「スクフ」・「タスク」等である。

「騎」——馬に跨る義である。轉じて馬に乗れる兵士をいふ。漢音は「キ」、吳音は「ギ」で、訓は「ノル」等である。

二、語句

「勝ちほこりたる敵兵を一舉に破る賤が嶽」 天正十一年三月に豊臣秀吉が近江國賤が嶽に二十餘壘を築いて柴田勝家に備へて置いた。四月勝家が佐久間盛政をして賤が嶽を攻めさせて其の二壘を抜いた。守將中川清秀は戰死した。此の時秀吉は美濃の大垣にゐたが、此の報を聞いて疾驅

して賤が嶽に着した。盛政之を聞いて其の不利のを察して退かうとした。秀吉急に之に逼つた。加藤清正・福島正則・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・片桐且元・糟屋武則槍を提げて突進した。世に之を賤が嶽の七本槍と呼んだ。

「七本槍のずる」と、ほまれは高き虎之助」「七本槍」は前記の七人をいふ。「ずる」は第一番又はさきがけの意味。「虎之助」は加藤清正をいふ。

「蛇の目の紋の陣羽織」「蛇の目」は太い環の形。「陣羽織」は昔時陣中で鎧の上に着た表衣で、形羽織に似て袖がない。

「武者振」 戎衣を着た姿。又は武人としての働きぶり。

「語りぐさ」 語るべきたね。はなしのたね。話柄。

「友危しと、身をすてて、おもむき救ふ蔚山や」 かの二度目の朝鮮征伐の時、淺野幸長が蔚山の城にあつたが明の大兵が來り攻めた。城中には兵少き上に、敵の攻撃が甚だ猛烈であつたがため、日に日に危くなつて來たので、幸長が使を清正のもとにつかはして救を求めた。清正之をきいて「我本國を發した時、幸長の父長政がくれぐれも幸長の事を我に頼み、我もまた其の頼を引受けた。もし幸長のあやふいを見て救はなかつたなら、我何の面目あつて再び長政に會はうや。」といつて、直ちに部下を率ゐて蔚山の城に入り、幸長と力を合せて明の大兵を引受けてたて

こもつたといふ、彼の美しい行動をいふのである。

「百萬餘騎の明軍の荒きもひしぐ鬼上官」 朝鮮征伐の時、清正は其奥深く會寧府といふ所まで攻入つた。明軍は清正の軍が遠く他の日本軍勢と離れたのを見て、清正を威嚇して軍をかへさせようと思ひ、使を清正の許に遣はして「我が明國の皇帝四十萬の大兵を發して既に日本軍を擊破つて之を全滅した。で朝鮮の中にはいまは汝の軍があるだけである。併し汝は軍令を正しくして人民を苦しめないことが、我が皇帝にも聞えてゐるから、汝が若し朝鮮の二王子を還し、汝の軍を引きあげたならば、特に我が國から數艘の船を遣はして送り還すであらう。併し汝がそれでも我が言に背くならば、我一撃の下に汝が軍を打破らう。」と説いた。清正之に答へて「二王子は秀吉の許を受けなければ之を還すことが出來ない。また此の地には高い山がある。たとひ汝の國の大兵が險を冒して來り攻めても、日に一萬人より多く來ることが出來ない。われ日に一萬人宛殺すとせば、四十日で全部をころすことが出來る。然る後、われ汝が國に攻入つて、かの二王子のやうに汝が國の皇帝をも捕へて日本に渡さう。」と言つて敵の荒きもをとつてやつた。こゝはそのことをいふのである。

「黒地に白き七文字の妙法蓮華の旗風に、異國までもなびきけり」「七文字」は南無妙法蓮華經の七文字をいふ。「異國」は朝鮮の國をいふ。即ち清正が朝鮮征伐のとき南無妙法蓮華經の七文字

をかいた旗を艦上に翻して威風堂々と押寄せていつたそのことをいふのである。

読み方に於て注意すべき語句

すゐ一 武者振むしやぶり 後の世のちよ 鬼上官きしやうくわん

三、文章

本文は加藤清正を歌つた韻文である。七五調で二聯からなつて居る。

第一聯は清正の凛々たる勇氣を歌つたのである。長烏帽子形の兜をかむつて、蛇の目の紋のついた陣羽織を着て、十字の槍を提げて、縦横無盡に活動して居る勇士の姿が紙上に躍動して居る。

第二聯も矢張清正の凛々たる勇氣を歌つたのである。信義に勇む清正の、威嚇に恐れざる豪膽な清正の、威風堂々たる清正の姿が髣髴として文字の上に躍活して居る。

以上の點は十分感味させる。

區分

第一時 全文を授く。

第二時 練習・應用。

教具

征衣を纏うた清正の圖。

教法

第一時

▽全文を授く

一、目的を告げ、後各自をして自由に一・二回讀ませる。

二、質疑に答へ、また主要の語句等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、後各自をして自由に二・三回讀ませる。

四、内容につき問答する。

「文章」の部を参照し、清正の凛々たる勇氣を十分感味させる。

五、朗讀の練習を行ふ。

自由に——また指名して。

第二時

▽練習應用

一、指名して讀ましめ、後質疑に應ずる。

二、内容につき問答して一層深く味得させる。

三、朗讀の練習を行ふ。

自由に——また指名して。

四、練習・應用。

(一) 語句の書取。

勝ちほこりたる敵兵を一舉に破る 七本槍のずる一とほまれは高き虎之助 蛇の目の
 紋 武者振 危き友を救ふ 百萬餘騎の明軍の荒きもをひしぐ 黒地 旗風……
 ……等。

(注意) 以上の語句中主要の語句の意味をも書かしめる。

(二) 語句の適用(短文作爲)

勝ちほこる 一舉にして破る 武者振 語りぐさ 荒きもひしぐ なびく……
 ……等。

教授上の注意

- 一、本課に於ては、本文の上に躍動してゐる清正の勇ましい活動を十分感味させるを中心として取扱つて行く。
- 二、本文には清正に關する史實即ち賤が嶽の戰、蔚山の籠城、會寧府に於ける事件等が背景になつて居るから、之を授ける前に、または其の時に簡明に補説するがよい。

三、朗讀に於ては、律動を意識し、之に従つて讀むやうに注意する。それは韻文朗讀に於ては必要條件であるからである。

四、よく韻文を普通文に改作することが流行してゐるやうだが、韻文に於てはよいことではない。韻文は韻文の形其の儘で讀んで味つて行く所にその眞意義があるのである。

備考

加藤清正

小字は夜叉若、後ち虎之助と改む、世に鬼清正とも云ふ。清忠の子で母は豊臣秀吉の母と従父姉妹たり。幼にして父を失ひ、母と共に秀吉に依る。十五歳の時元服して食祿を受く、天正九年因幡の鳥取城、備中の冠城、攝津の山崎、丹波の龜山等の軍に従ひ殊功あり。十五年五月賤ヶ嶽七本槍の第一たり。十三年功を以て従五位下主計頭に任ず。十五年征西の軍に宇佐城を守り大功あり、終に肥後中國二十五萬石を受け熊本城に治す。十九年八月秀吉意を証明に決し諸將を召して命を傳ふ。清正進んで曰く、公明を征して、各將の戦功を論じ、封土を得せしむ。樂み之に過ぎざるなり。臣罵なりと雖も命を奉じて先鋒となり、朝鮮王を擒にし、然る後明に入りて四百餘州を屠らんと。秀吉大に悦ぶ。文祿元年秀吉証明の師を起す。軍旗を賜ひて第一先鋒となす。清正威鏡道より進み、所在虜兵を破り、遂に王子を虜にす。益々進んで女真に入る。和成りて師を選へす。後ち和敗れ、慶長二年正月再び行長と共に兵を率ゐて朝鮮を征す。攻城・野戰利る所武勇を轟かす。遂に蔚山城に入りて、大に虜兵に圍まれ、糧食盡きて大に苦む。然れども屈せず、遂に大に虜兵を破る。証明の役に従事する前後七年、清正尤も名を異域に掲げ、韓人永く其の勇に怖ると云ふ。會々秀吉薨す。諸將と相繼ぎて軍を選へす。慶長五年石田三成兵を擧げ、上杉景勝之に黨す。清正固より三成と善からず、徳川家康の爲めに國に就きて西海を鎮撫す。十年四月功を以て従五位上侍從兼肥後守となる。十六年三月秀頼京都に往く。清正陪從す。福島正則兵一萬を督し大阪に留る。清正従兵五百を撰び、三百を分けて、伏見京都に

徘徊せしめ、以て不慮に備ふ。無事歸路し、伏見より船に乗りて邸に還る。後ち七首を懷中より出し、推戴して涕を流し、大
團の供恩今日に報ずるを得たりと。尋て國に歸り、熱病を以て卒す。歳五十、遺命を以て甲冑帶劍のまゝ中尾山に葬る。清正
は居常論語を好み、國を出入する時、船中にて必ず披讀せしと云ふ。又合して奢侈を戒め、學問をすすめ、忠孝を勵ましめ、
武事を怠るなからしむ。(國史大辭典による)

第二十八 僕の子馬

要旨

形式上では新文字の読み方・書方、難語句の意義、語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。
内容上では、一兒童が一小馬を深く愛護せしその心情を深く味はせ、傍ら馬の性質及び之が飼
育上愛護の大切なことを會得させ、延いて一般に他の家畜をも愛護せんとする精神を養ふを以て
要旨とする。

教材

一、文學

「牡」——動物のをすの義である。漢音は「ボウ」、吳音は「ム」、慣習音は「ボ」で、訓は「ヲス」であ
る。

「漆」——本義は川の名。後變じてウルシの義となる。漢音は「シツ」、吳音は「シチ」で、訓は「ウ

ルシ」である。

「忙」——心のいそがしい義である。漢音は「バウ」、吳音は「マウ」で、訓は「イソガシ」等である。

「放」——逐ひはなつ義である。漢・吳音共に「ハウ」で、訓は「ハナツ」・「ユルス」等である。

「飼」——糧食の義である。轉じて養ふ義となつた。今は専ら畜類を養ふ義に用ゐて居る。漢音
は「シ」、吳音は「ジ」で、訓は「カフ」・「ヤシナフ」等である。

「唱」——本義は唱導の唱で、一人先つて歌ひ、他人之に和する義である。是から導く義とかなり、
更に轉じて「ウタフ」義となる。漢音・吳音共に「シャウ」で、訓は「トナフ」・「ウタフ」等である。

「叱」——しかり罵る義である。漢音は「シツ」、吳音は「シチ」で、訓は「シカル」等である。

二、語句

「北辰」 馬の名。

「ナツイテ」 親しみ從ふ意。

「牡馬」 をとこうまのこと。

「毛並」 毛のありさまをいふ。

「夢中」 或一事に熱中して我を忘れること。

「北斗」 こゝでは親馬(め)の名。

「ヒヨロ長い足」 力のないよわさうな長い足をいふ。

「メンタウヲ見テヤルカラ」 こゝでは「よくせわをしてやるから」といふいみにして知らせる。

読み方に注意すべき語句

大 <small>おほ</small> ノ仲善 <small>なかし</small>	牡馬 <small>うま</small>	骨組 <small>ほねぐみ</small>	毛並 <small>けなみ</small>	夢中 <small>むちゆう</small>	子馬 <small>こま</small>	御祖父サン <small>おぢいさん</small>	草原 <small>くさほら</small>	利口 <small>りこう</small>	側 <small>かた</small>
--	----------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	----------------------	----------------------------	------------------------	-----------------------	---------------------

三、文章

本文は一兒童の經驗即ち子馬から得た自己の經驗を叙述したのである。叙述の形式は獨語式である。次の諸點は殊によく玩味させる。

「此ノ村ニハ一歳駒モタクサンニキルガ、アンナリツバナ牡馬ハ一匹モキナイ。丈モ高く、骨組モ太ク、四足モ丈夫デ、毛並モ漆ヲ塗ツタヤウニツヤ／＼シク、ホンタウニ見事デアアル。」——愛馬に對する美しい誇である。またこれが愛育の標徴である。

「北辰ノ生マレタノハ去年ノ四月デ、裏山ノ櫻ノ花ガ雪ノヤウニ風ニ散ル日デアッタ。」——花散つて無常の寂味を感じる日に、此の楽しい嬉しい生産があつたのである。

「ワザト薄暗クシテアル奥ノ方ニ、母馬ノ北斗ガカハイイ子馬ヲ前ニシテ、イカニモツカレタヤウニ寝テキタ。」——何となく可哀相な思もし、また母子健在の嬉しさもある所である。

「今度生マレタノハ、私ニ世話ヲサセテ下サイ。」——眞剣な希望である。

「ウチノ御祖父サンハ馬ノ扱方ガ上手ダカラ、其ノオ指圖ニ從ツテ、北辰ヲキツト良イ馬ニ育テヨウト、僕ハ一生ケンメイニナツタ。」——御祖父さんは馬の養育法にかけては村一番の得意者なのである。

「北辰ハオクビヤウサウナ目ヲシテ、始メテ見ル此ノ世界ヲモノ珍シゲニナガメテキタガ、毎日出シテキル中ニ、乳ヲ飲ムノモ忘レテ、ヒヨロ長い足デ元氣ヨク草原ノ上ヲハネ廻ルヤウニナツタ。」——北辰が始めて此の世界を見たとき、どんなに不思議であつたらう。おくびやうさうな目をして此の世界をながめて居る様子が髣髴として目の前に浮ぶ。また弱さうな長い足で草原にとんで歩く可愛姿も眼前に見える。

「食物ヲヤリ始メタノハ、生マレテカラ五六週間ノ後デアツタ」半年バカリタツテ、イヨ／＼乳ヲ離レル頃カラ、體ノ手入ヲシタリ、運動ヲサセタリ、僕ノ仕事モ追々忙シクナツタ云々。」——茲には子馬の養育法的一端が表はれて居る。善良な馬にするには善良な方法の下に、最善の努力、細心の注意を要することを語つたのである。

「北辰ハホンタウニ利口デスナホデアアル。……足ヲ擧ゲサセテ蹄ノ裏ヲ掃除シタリ、毛櫛デ手入ヲシタリシテモ、ジツトオトナシクシテキル。物ニ驚イテカケ出サウトスルヤウナ時デモ、」

テノヒラデ輕ク頭ヤ背中ヲナデテヤルト、スグ安心シテ靜マツテシマフ。僕ニナレテキル事ハ非常ナモノデ、放シ飼ニシテアル時ナドニ僕ガ呼ブト、聲ヲ聞キツケテ、スグ何處カラカ出て來ル。馬屋ニキル時デモ、僕ガ行クト、寢テキテモ起キテ來ル、鼻ヲスグ附ケル。日曜ナドニハ、ヨクウマサウナ草ノアル野原ヘ連レテ行ク。僕ガ寢コロソデ唱歌ヲ歌ツテキルト、イツマデモオトナシク草ヲ食ヒナガラ、側ニ遊ンデキル。僕ガカケ出セバ北辰モカケ出シ僕ガ止レバ北辰ガ止ツテ、追ツタリ追ハレタリシテ樂シク一日ヲ過シテシマフ。馬ハホソタウニカハイイモノダ。」馬ノ温順な性質、人の愛護の重厚、馬と人との心の交感、二者の和合と愉快さが誠によく現はれて居る。

「オ前ガヨクメンダウヲ見テヤルカラ北辰ハキツト良イ馬ニナルダラウ馬ヲ良ク育テルニハ短氣ヲ起サズニ、カハイガツテヤルニ限ル。」馬を育てる奥の秘訣は唯愛にある。愛！之は馬だけでなく、すべての生物を育てる上に根本の要素である。

「日本ノ馬ハ世界中デ一番氣ガ荒イトイハレルサウダガ、ソレハ馬ガ惡イノデハナクテ、世間ノ扱フ人ガ惡イノダ。マルデ馬ニ對シテ同情ガナクテ、ムリヲシテ苦シメルカラ、カミ附イタリケタリスルヤウナ、惡イクセガ附イテシマフノダ。馬ホド從順デ忠實ナモノハナク、馬程利口デ物覺ノ良イモノハ少イ。ダカラ惡イ事ヲシタ時ニ叱ルノハヨイケレドモ、常ニハヨク心ヲ察

シテ、親切ニ扱ツテヤラナケレバナラナイ。サウスレバ、言フ事モヨクキクシ、サカラフヤウナ事モ決シテナイモノダ。」日本に育つ馬でも牛でも犬でも其他の家畜でも皆性質が荒くて、また體質も劣等である。之れ全く日本人は家畜に對する同情心のないのに基くのである。實に日本人の缺點で、また恥辱である。こゝは實に邦人の家畜に對する缺點を指摘し、反省を促したので、至切な教訓である。

「モウ間モナク二歳駒ノ市ガ始ル。北辰ハキツト軍馬ニ買上ゲラレルニ違キナイ。僕ハアノ馬ト別レルノガ何ヨリモ悲シイガ、今ニエライ軍人ノ乗馬ニナルカト思ヘバ、マタウレシクモアル。」眞實に愛育した我が子馬がやがて人の手にわたるかと思ふと、そこに離別に對する無限の悲みと無限の寂味がある。「今ニエライ軍人ノ乗馬ニナルカト思ヘバ、マタウレシクモアル。」は理知に訴へた慰安だが、本當に別れる日が來たとき、どんなに悲しいことであらう。どんなに寂味を感じることであらう。

區分

第一時 始から百二十五頁三行迄を授く。

第二時 百二十五頁四行から百二十六頁八行迄を授く。

第三時 百二十六頁九行から百二十八頁七行迄を授く。

第四時 百二十八頁八行から百三十頁九行迄を授く。

第五時 全文の總括的復習及び應用。

教具

馬の掛圖

教法

第一時

- 一、先づ目的を告げ、次に各自をして自由に一讀させる。
- 二、質疑に應答する。また教師より主要の語句、語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、後各自をして自由に二三回讀ませる。
- 四、内容につき問答する。

(「文章」の部参照)

五、誦讀の練習を行ふ。

自由に——また指名して。

六、書取。

僕の子馬

牡馬

骨組

漆を塗つたやうに

裏山

夢中で馬屋へ飛んで行つた

世話………等

〔注意〕 第二・三・四時も右に準じて授ける。

第五時

一、各節毎に指名して讀ませる。而して各節に於ける質疑に應答し、また教師よりも主要の語句等につき問答する。

二、内容につき問答する。

「文章」の所に記してある諸點を一層深く感味させる。

三、よく内容を意識しながら自由に二三回讀ませる。

四、練習・應用。

(1)各自をして自分でまだ暗書し得ない漢字を拾つて書かせる。(教師は其の間に劣等生の指導を行ふ)

(2)各自をして自分でまだ分らない語句あれば夫を各自のノートに摘出させる。(教師は前同様)而して終つた頃それ等につき教へてやる(先づ知つた子供に言はしめ、尙不十分に向つては教師之を教へてやる)

(3)次の語句を適用して短文をかゝしめる。

つや／＼しく 夢中で 見とれて おくびやうさうな 珍しげに 放し飼にして
めんだうを見てやるから ……………かと思へば、また…………。(時間の都合によつては家庭課
題とする)

教授上の注意

- 一、本課に於ては、一兒童が馬の養育に對して注ぎし濃密な愛。馬の本來の性質。馬の養育に對して父の言つた訓言等のあたりは誠に力を入れて取扱つて行く。
- 二、かうした文章に對する教師の態度は、彼の批判的態度をとらないで、どこ／＼までも同情的態度によつて純真に内容に活きて取扱ふ所ありたい。
- 三、全文の復習時には、語句の書取、適用等の方面にも力を注ぎ、内容だけに偏重せぬやう注意する。

備考

馬

馬は、哺乳動物にて、脚は一蹄なるを以て、奇蹄類に屬す。現今殆ど全世界に分布し、廣く利用せらる。形態——軀幹長大にして、一見、勇壯活潑の容姿を具ふ。頭と顔面とは、頗る長きを以て、丈高きもよく地上の草を食するを得。耳は直立し自由に動かして音響の來る方に向くるを得。頭と頸には美しき鬃あり。尾毛は頗る長大にして、これを揮ひて、

蠅・虻等の害蟲を追ふに適す。四肢は細長にて、之に附屬せる筋肉は頗るよく發達し、甚だ強健なるを以て走ること速なり。元來五趾を有する動物なりしが、四趾は次第に退縮して中指のみ發達し堅牢なる蹄を有して趾端にて歩行せり。

齒は前後に上下各六枚づゝの門齒ありて草を嚼切るに適し、その奥にある左右の上下各六枚づゝの臼齒は扁平なる咀嚼面に嚙鬚を存するを以て、食物を磨碎するに適せり。門齒と臼齒との間には、廣き間隙を存し牡馬には、小形なる大齒を存すれども、牝馬には全くこれを缺く。この間隙は、嚙を咬へしむる所なり。

十分に成長したる大形のもの、往々六尺に達し體重百五十貫以上に及ぶものあり。

習性——元來草食動物なれば性質激烈ならず、頗る柔順にてよく人に馴る、武器を有せざるが故に敵を攻撃することなく防禦の方法は、その逸足を作用するか、又は後脚にて蹴るのみなり。性物に驚き易きも、亦勇壯なるものにて戰場に出るも恐るゝことなし。好みて大豆・麥を食し、禾本科植物、莖禾植物も其嗜好する所なり。アラビヤ人は馬を愛すること尤も深く、子供も馬と共に遊び戯れ居るといふ。

效用——その従順なる性質、強壯なる體力、迅速なる脚力は古來各種の目的に向つて使用せらる。農耕用、運搬用、機械用等はその主なるものにして、軍事には殊に重要なものなれば各國は競うて改良に腐心せり。肉は牛肉の美味には及ばざれども、亦食用に供すべく、皮は太鼓に張る外、用途少からず。骨皮は肥料とし、蹄は種々の細工物となり、尾は飾の底綱其他の細工とし、糞尿は有益なる肥料となる。斯の如く馬はその生前死後共に人生を裨益すること頗る多く、家畜中の最重要なるものなり。

産地——アラビヤ馬は、世界最優の良種にて現今世界各地に於ける良馬と稱するものも皆アラビヤ馬によりて改良したるものなり。我國にては、薩摩・秋田・仙臺・三春・南部(岩手青森)などの産有名なれども、それを外國産の善良なるものに比すれば、大いに劣等なるを以て、近來、馬匹改良の聲喧しく、西洋の良種を輸入し、各地方に種馬所、軍馬育成所などを開設して盛に馬種の改良と繁殖とに努めつゝあり。

種類——種類には、日本種・雜種・西洋種あり。純粹の日本種は體軀矮小にて現今飼育するもの少し。雜種には滿洲馬によりて

改良せられたるものと、西洋種によりて改良せられたるものとあり。滿洲馬によりて改良せられたるものは、現今最も多く飼養せられるものにして、日本種に比すれば、やゝ偉大なり。西洋馬によれる雜種は一層雄大なりとす。西洋種は馬匹改良の目的にて輸入せられしものにて、從來我國にありしものに比すれば大に進歩せるものなり。

又毛色によりて、栗毛・鹿毛・月毛・葦毛・青毛・白毛などの名をつく。栗毛とは全體赤褐色なるもの、鹿毛とは鬣及び四脚の下部の黒きもの、月毛とは黄毛と白毛と混じたるが如きもの、葦毛とは栗毛・鹿毛・黒毛・白毛の混生せるものにして、栗葦毛、鹿葦毛、青葦毛などの別あり。圓形の斑紋をなせるものを連綿葦毛といふ。青毛とは全體黒毛を生ぜるものをいひ、白毛とは全體の白きものをいふ。(理科教材解説)

第二十九 競馬

要旨

形式上に於ては、新文字の讀み方・書き方、難語句の意義、語法等につき知らしめて本文の讀解に習熟させる。

内容に於ては、本文を通じて昔の習俗、競馬の勇壯な事、少年の美しい義侠心等を理解させ感得させるを以て要旨とする。

教材

一、支字

「式」——ノリ又はテホンの義である。漢音は「シヨク」、吳音は「シキ」で、訓は「ノリ」・「ノット

ル」・「ツツシム」等である。

「添」——ウルホス義。後轉じてソへ・マス等の義となつた。漢・吳音共に「テン」で、訓は「ソフ」等である。

「應」——當也と註してある。言語應對の應の義である。漢音は「イヨウ」、吳音は「オウ」で、訓は「アタル」・「マサニ」・「コタフ」等である。

「援」——相引き合ふ義である。漢音は「エン」、吳音は「ラン」で、訓は「ヒク」・「タスク」等である。

二、語句

「競馬」——きはひ馬・馬かけ・くらべ馬ともいふ。數人馬に乗つて疾走し、其の先着を競ふ壯快な一種の競技である。

「鎮守の祭禮」——「鎮守」は其の土地を鎮め守る神又は神社をいふ。

「氏子」——氏神(氏の祖神)に對してその子孫をいふ。又産土神に對して其の土地に住して恩賴を受ける民をいふ。

「案の如く」——前以て考へた如く。

「神主」——神に仕へる人。又神事に仕へる人の長で其の神社に於ける神事一切を行ふ人をいふ。

「今や遅しと」——早く三番太鼓の鳴ることを待ちわびて居るさまをいふ。即その合圖のあるのを

「おそしおそし」として、もどかしがるさまをいふ。

「村の名折れになるぞ」「名折れ」は名を損すること。また面目を失ふことをいふ。こゝに「村の名折れ」とは一人の勝負が、その村全体の勝負になるをいふのである。

「鳴るが早いぞ」鳴るのが早いか、駆け出すのが早いかの意。即ち「鳴ると同時に」といふ意味である。

「一散に」「一目散」といふに同じ。脇目もふらずに。ひたすら急いで。

「きもを冷して」いたく驚くさまにいふ。「きもをつぶす」に同じ。「きも」は心である。意外な變事にあふとき、ひやりと心に冷氣を感じるが故にかくいふ。

「見上げたりつばな心掛だ」「見上げた」は上に仰ぎ見ることで、「まさつてたふとく見えるさま」をいふ。

「五箇村はおろか」「五箇村はいふもおろか」の意。即ち愛吉の美德は天下に顯はるべきもので事その五箇村はいふまでもないことである。故にそれをたゞ五箇村のほめ者と限つていふはおろかなことであるといふ意味である。

讀み方に於て注意すべき語句

競馬くらべうま 氏子うぢこ 騎手きしゅ 神主かみぬし 競走きやうそう 境内けいだい 立石たていし 名折れなを 一散いっさん 附添人つきそひにん 大勝おほい勝ち

三、文章

本文は一つの事件を客觀的に叙述した文章である。而して第一節は全文の總叙で、競馬のことは第二節から始つて行く。

第二節は毎年行はれる競馬が行はれたのである。併し二人の騎手はいづれも、すぐれた騎手のこととて、同時に決勝點へ着き、そのために物言ひとなり、遂に神主は二人だけで再度の競走を宣告したことを叙したのである。文は簡短で、勇ましい競馬の姿、烈しい應援振等については、別に叙してないけれども、是等は讀者の想像に訴へて讀ましむべきである。

第三節以下は再度の競争の有様を叙述したのである。而して本節はこの日は一層おびたしい見物人で、境内は早朝から、もう人を以てうづめられたこと。定め時刻が近づくと、二人の騎手が多くの人々にまもられて鳥居の下に集つたことを叙したのである。これから再度の活躍に入らんとする、その第一歩である。

第四節は二人の騎手は一番太鼓、二番太鼓の合圖に従つて、神に勝利を祈り、社後の競馬場に到り、立石の下に馬の轡を並べて、三番太鼓の合圖を今や遅しと待構へて居る。一方見物人は口口に叫んで聲援して居る所を叙述したのである。いよゝゝ大躍動に入らんとする刹那の光景である。

第五節はいよ／＼本活動を叙したのである。上手な二人の騎手は先に立つたり後になつたり、追越したり追越されたりして、ほとんど勝負が見えない。見物の人々が手に中に汗をにぎつて夢中になつて應援して居る、其の壯絶な熱狂な光景は眼前に如實に開展して居る。

第六節は二人の騎手はもう決勝點間近く進んだ。見物人の應援は極點に達して居る。此の時突然との凶事が起つた。それは一人の騎手の馬が躓いてひざを折つたため、その騎手ははづみをくつて池の中に投げ落されたことを叙したのである。意外のこの出来事に見物人一同はアツと驚いて口を開けた儘立つてまだ何等の處置に出ない暫時の場面である。

第七節は他の一人の騎手が、それを見るや否や、急に馬を止めてつるりとおりて、水に浮んだ騎手を救ひ上げ、附添の人々も見物人も駈けつけて、介抱して居る所を叙したのである。不幸な場面だが、特に一人の騎手の高潔な心情が輝々として此の一節を清く飾つて居る。

第八節は高潔な騎手の方の人々は其の美しい行動をほめ、更にもう一度やりなほして勝負を定めようといふに對して、不幸な騎手の方の人々は、深刻にその美しい行動に感じ、心よく勝利を讓る所を叙したのである。互のあさましい技の競合から離れて自己の勝利を打ち忘れて、人の危を救うたといふ高潔な至純な人情美が勝利を得たのである。

第九節は本文の結收で、高潔な善と至純な美を稱揚する民衆の廣い聲である。

以上の諸點は特に深く感味させる。

區分

- 第一時 全文の通讀。
- 第二時 第一・二・三節(自百三十頁十行至百三十二頁八行)を授く。
- 第三時 第三・四・六・七節(自百三十二頁九行至百三十五頁三行)を授く。
- 第四時 第八・九節(自百三十五頁四行至百三十七頁二行)を授く。
- 第五時 全文の總括的復習及び應用。

教法

第一時

▽全文の通讀

本時に於ては先づ目的をつげて、次に各自をして自由に一讀させ、さうして大體どうした事件がかいてあるかを捕捉させる。次に各節毎に指名して讀ませて、新文字の讀み方や難語句の意義をざつと教へて行く。

第二

▽第一・二・三節を授く。

第二十九 騎馬

一、各節毎に指名して讀ましめ、其處に於ける語句・語法等について問答する。

二、内容につき問答する。

(一)昔の神事上に於ける風習。

(二)二人の騎手——神前の儀式——競争——勇壯な姿の想像——勝利の争——神主の宣告。

(三)再度の競馬——人出の一層の多——兩騎手の入場等

三、讀み方の練習。

指名して——また自由に。

四、書取(意義をも問ふ)

競馬 祭禮 騎手 五箇村 神前の儀式 決勝點 神主 境内 附添人……

……等。

〔注意〕 第二時・第三時・第五時も第一時に準ずる。

第五時

▽全文の總括的復習——應用。

一、復習

自由に一讀——質疑に答ふ——内容につき問答。

二、練習應用。

(一)次の語句の意義をかゝしめる。

競馬 鎮守の祭禮 騎手 神前の儀式 決勝點 境内 村の名折れ 手に汗を

にぎる 應援 見上げた心掛……等

(二)次の語句をつかつて短文を作らせる。

案の如く おびたしい 今や遅しと 名折れ 手に汗をにぎつて 夢中になつ

て 上を下へのさわぎ。

三、批判

此の文章につき鑑賞的批判を行ふ。

教授上の注意

一、本文に於ては、一騎手が自己の責任のある大切な勝利をも打忘れて、相手の騎手の危難を救つた。その高潔な行動に感激させるを中心として取扱つて行く。併し他の一騎手即ち水に落ちた騎手に對しても其の不幸に對し十分同情心を誘起する所もあらねばならない。

二、本文に於ては競馬の光景殊に三番太鼓を今や遅しと待構へて居る所、いよ／＼太鼓が鳴つて二騎手が先立つたり、追越したりするあたりは、如何にも如實に描寫してある。かうした點は

叙述上特に注意して取扱ふがよい。

三、本文に於ける第八節は對應の二村が互に美しい道德に活き、殊に不幸な騎手の方の人々が對者の至純な至高な行動に感激して勝利を譲つた所は、此の文に於ける最善の判決であるから注意して授ける。

四、本文はどつちかといへば兒童の想像を量多く投入して讀むべき文章である。だから其の考で取扱はなければならない。

第三十 水害見舞の文

要旨

形式上では、讀替文字の讀み方・書き方、難語句の意義、語法等について知らしめて本書簡文の讀解に習熟させる。

内容上では、本文によつて親戚・知友間の吉凶・慶弔に對する社交上の知識を授け、傍ら同情心を養ふを以て要旨とする。

教材

一、語句

「草々」 勿々に同じ。「あら〜」の意。書簡文の結語の一である。

「ぼつく〜」「ぼつり〜」といふに同じ。こゝでは「あちらに一けん、こちらに一けん」などいふ意味である。

「必要書類」 大切なかきつけ。

「取りまとめ」 「取り」は接頭語。

「御禮かたぐ〜」「かたぐ〜」は「ついでに」・「いつしよに」などの意。

「取りあへず」 「取るべきものも取らずに」又は「すぐに」の意味。

讀み方に注意すべき語句

出水しのつすゐ 御大勢ごたいせいか (大勢はオホゼイとよんでもよい) 立退たちのおいた者もの 水音みづね 鳴聲なげこゑ 方々はうほう

後始末あとしまつ

二、文章

本課は水害見舞の文と其の返事とである。甲者は候體で、乙者は口語體でかいてある。そこで甲者に於ては之を通じて、

- 1、天災に對して對者の様子を氣遣ふ心情が強くあらはれて居ること。
- 2、かうした天災や其の他の凶事に對しては、親戚知友の間は必ず之を見舞ふことが人情に基

く禮であること。

3、かうした手紙をかくときには。

(イ)言葉が簡明であること。

(ロ)同情の心が充分にあらはれてゐること。

(ハ)前文も末文もいらぬこと。

が大切な要件であること。

等を十分知らさなければならぬ。また乙者に於ては、本文を通して、

1、返事は直ちにいだすこと。

2、事實の叙述は偽らず、また誇大に失せぬこと。

3、對者の安心を求めること。

4、見舞はれた其の好意に對し深い感謝の情を表現すること。

等を十分知らさなければならぬ。

本文に於て、甲者にあつては、急變なときに對する態度も心もよくあらはれて居る。また乙者にあつては、見舞に對する心の喜びは勿論、事實に對する叙述も簡單で而かも委細を盡して居る。

また偽りもなく誇張もない。本當によく出來てゐる。是等の點も十分知らしめる所ありたい。

區分

第一時 水害見舞の文を授く。

第二時 同じく返事を授く。

第三時 同上

第四時 全文の練習應用。

教法

第一時

▽水害見舞の文を授く。

一、目的を告げ、後、各自をして自由に一讀させる。

二、質疑に應答し、また教師より主要の語句、語法等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、後、各自をして自由に一讀させる。

四、内容につき吟味する

連日の大雨と懸念——新聞と驚愕——見舞……等。

五、誦讀練習

指名して——また各人自由に。

六、書取

連日の大雨 新聞 一帯の水 死傷 大勢 御見舞……等。

第二時

▽返事の文を授く。

本時に於ては、先づ各自をして自由に一讀させて、其の大意を捉へさせ、次に一節々々について彼等の質疑に答へ、また主要の語句・語法等について問答し、それから指名して、また各自自由に讀まして誦讀の練習を行ふ。

第三時

▽返事の文を授く。

- 一、各節毎に指名して讀ませせる。
 - 二、そこに於ける質疑に應答する。
 - 三、内容について問答する。
 - 四、誦讀の練習を行ふ。
- 水害の悲惨な光景を十分感味させる。また同情心をそゝる。
- 各自自由に——また指名し。

五、書取

水害 強雨 大暴風雨 立退く 犬の鳴聲もたゞならず 飛出す 裏山 必要書類 鎮守の森 被害 流失家屋 死傷者 後始末等……等。

第四時

▽全文の總括的復習——應用。

- 一、各自自由に一讀させ後彼等の質疑に答へる。
 - 二、次のことを問答して明確に理解させる。
 - 1、見舞文に具備すべき要件(本文と對照して)
 - 2、見舞文の認方(同上)
 - 三、練習・應用。
 - (一)候體を口語體になほさせる。
 - (二)次の語句の意味をかゝせる。
- 水害見舞 被害 大暴風雨 早鐘 必要書類 鎮守の森 流失家屋……等。

教授上の注意

一、候體に於ては、それが讀解に十分習熟させなければならぬ。

而して之が方法として全文を口語體に譯させることもよい。第四時にさうしたのは此の精神である。

二、本課に於ては、之が内容を十分理解させ、また感味させるは勿論だが、かうした書簡文を認める時の形式等を理解させることも忘れてはならない。

三、見舞文殊に本文の如き天災に屬するものにあつては、見舞ふべき時をあやまつてはならないこと、及び記載すべきことは單に先方の安否を問ひ、且慰めることに止め、くだくしき餘事に涉らないのを以て本領とすることを知らしめる。併し慰問に對する返事は、成るべく事實を詳記して、慰問者に十分安心を與へなければならぬことを理解させる。

第三十一 雨 と 風

要 旨

形式上では、新文字の讀み方書き方、難語句の意義、語法等について知らしめて本文の讀解に習熟させる。

内容上では、四季の雨風とその眺め、及びそれに対する人の心持を感味させ、併せて自然を愛する精神を養ふを以て要旨とする。

教 材

一、文字

「堤」——本義は滯る義である。隄に假借してツツミの義となつた。漢音は「シ」、吳音は「ジ」で、訓は「ツツミ」等である。

「亂」——本義は治める義である。後ミダルの義に轉じた。漢・吳音共に「ラン」で、訓は「ミダル」等である。

「果」——木の上に實がなつて居る所である。轉じて應報・終極等の義となつた。漢・吳音共に「クワ」で、訓は「クダモノ」・「ハタス」・「ハタシテ」等である。

二、語句

「しめやかに」——うちしめつて靜かなさまに言ふ。

「紅白花は開く煙雨の中」——唐の詩人杜牧が「念昔遊」といふ詩の語句である。その全體は次の如くである。

李白題詩水西寺 古木回巖樓閣風
半醒半醉遊三日 紅○白○花○開○煙○雨○中

一首の意は「水西寺はかの大詩人李白の詩を題した有名な寺で、自分もかつていつた寺である。

自分の此の寺についた頃は、丁度春の眞最中で、古木が巖をめぐつて生ひしげり、樓閣にそよそよと春風が吹いてゐた。自分は三日の間こゝで酒を飲んで、半ば醒め半ば酔つた有様で楽しく遊んでゐた。が其の頃は紅の花や白い花が煙のやうにぼつとした春雨の中に咲いてゐて、その景色といつたら實に言ひやうのないほど美しかつた。」といふほどの意味である。

「うらめしい心地」 うらめしく思ふ心持。

「梅の實の熟する頃」 陽曆の六月(陰曆の五月)梅の實の黄熟する頃をいふ。

「五月雨」 陰曆五月の頃即ち夏の半に降りつく霖雨の稱。「ツユ」とも「梅雨」ともいふ。梅雨の頃は氣候頗る陰濕で、黴菌の發生多く、衣服・書畫、其他の品物はこれがために損害されることが多い。だが稻又は蕃薯の植付の如きは、この降雨を利用すること大であるから、農業の上からいへば大切な雨である。

「二百十日」 立春から二百十日目の日で、大抵太陽曆の九月一日頃とする。其の頃は早稻の花盛であるから、農家にとつては當日は厄日である。

「大あらし」 大暴風雨をいふ。九月中旬頃は我が國では時候の變化するときであるから、屢々暴風雨が起つて、家を破り、樹木を倒し、水害を起すなどのことがある。

「鳴子」 小さい板に小さい竹の管を糸で列ね結んだもので之に繩をつけて引くと管が板にふれ

てがらくと鳴ることになつて居る。田島にそなへて雀などを驚かし逐ふに用ひる。

「むら雀」 「むら」は群の轉で、むらされることである。で「むら雀」は群がれる多くの雀をいふ。

「冬木立」 冬の木立。即ち冬になつて木の葉が悉く落ちて、木々の梢のさびしく立ちならべるをいふ。

「木枯の風」 「木枯」は木嵐コアラシの轉。秋冬に吹く疾き風の稱である。

「銀世界」 白雪が地上をおほうた美しい景色を形容してかくいつたのである。

讀み方について注意すべき語句

心地こころ 二百十日にひゃくとつか 黄色きいろ 鳴子なるこ 落葉おちば 冬木立ふゆのきたち 木枯こがらし 雨戸あまど 何時の間いつの間

三、文章

本文は四季の雨風と其の眺め、及びそれに対する人の心持ちを叙した、いかにも情趣の深い文章である。

「春の雨はしめやかに降つて、雨だれの音も靜かに聞える。……そよよと吹く春風には我が身も蝶の様に飛立ちたくなる。」

梅の實の熟する頃降續く五月雨は、農家に取つては大切な雨である。……一天にはかにかき曇つて、ほし物を取りこむひまもない夕立は

雨と風

さわがしい中に勇ましいところがある。

二百十日頃の大あらしで、家は倒れる、堤は切れる、稻の花は散る……

秋の雨風

……其の落葉の上に雨の降りかゝるのは、何となく物さびしい。

葉の散果てた冬木立に吹きすすむ木枯の風は音を聞くだけでも物さび

しい。雨戸を明けて見ると……翌朝起きて見れば何時の間に雪に變

つたか、見渡す限り銀世界になつてゐることもある。

冬の雨風

春の雨風の所では、

1、春雨がしめやかに降つて、一雨毎に花をもよほす楽しさ。

2、煙雨の中に紅白の花咲くその美しい風情。

3、しかし花をもよほす雨はやがて花を散らす雨となることの恨み。

4、そよ／＼と吹く春風に我が身もふは／＼と浮立つやうな心持。

等をよく感味させる。次に夏の風雨の所では

1、五月雨は陰鬱な雨であるが、また植付に大切なといふ所から嬉しい雨であること。

2、一天俄かにかき曇つて干物を取込むひまもないほどに降つて来る夕立は、さわがしい中にも勇しくあること。

等をよく感味させる。次に秋の雨風の所では

1、家は倒れ、樹は折れ、堤は切れる、稻の花は散るといふ二百十日頃の大あらしの凄味と憂

へ。

2、黄色に實のつた稻田の上につるしてある鳴子に秋風が吹渡ると、から／＼と鳴るやさしい

音。此の音に驚いてぱつと飛立つ群雀の可愛い姿。

3、赤や黄に染まつた木の葉が一風毎にひら／＼と散り落つる姿の美しさ。

4、其の落葉の上に降り落ちる雨の音の物さびしさ。

等を深く感味させる。次に冬の雨風の所では

1、葉の散果てた冬木立に吹きすすむ木枯の物さびしい音。

2、冬の月の冷い光。

3、夜の雨が静かに雪に變つて、見渡す限り銀世界になつてゐる曉の美しい雪景色。

等を深く感味させる

區分

第一時 自始至百四十三頁九行迄を授く。

第二時 自百四十三頁十行至百四十五頁三行迄を授く。

第三時 全文の總括的復習及び應用。

教法

第一時

- 一、目的を告げ、後各自をして自由に一讀させる。
 - 二、質疑に應答する。また主要の語句等について問答する。
 - 三、一兒童をして讀ましめて其の誤れる所を正し、後各自をして自由に二三回讀ませる。
 - 四、内容につき問答する。
 - 五、誦讀の練習
- 各自をして——また自由に。

第二時

第一時に準じて授く。

第三時

一、復習

指名して讀ませる——質疑に應答する——内容について問答する(一層深く感味)——自由に二

三回讀ませる。

二、練習應用

(一)漢字の書取

雨と風 紅白花は開く煙雨の中 花の香 飛立つ 田植の時節 夕立 家は倒れる
 稲の花 農夫 鳴子 落葉 木枯 雨戸 葉の散果てた冬木立 一風
 毎にひらひらと散亂る 堤は切れる 銀世界……等。

(二)語句の適用(短文作爲)

しめやか もよほす かき曇つて 物さびしい 吹きすさむ 物すごい……等

教授上の注意

- 一、本課に於ては、四季の雨風と四季の風景。四季の雨風と人の心持等について出来るだけ深く感味させるを主眼として取扱つて行く。
- 二、本文はどつちかといへば兒童の過去の經驗と交渉し、その想起と相俟つて味ふべき文章である。だから其の考で取扱ふ所なければならぬ。
- 三、本材料は、一般的に言つて田舎の子供には味ひ易いが、都會兒は多少境地の想像に苦むだらうと思ふ。で出来るだけ繪畫等を用意して示すことを怠つてはならない。

四、此の種の文章に於ては勿論教師より暗示・指導を與へることも必要であるけれども、出来るだけ彼等自身をしてじつと靜かに眺めて、自我を投入して鑑賞させることがより必要である。でそのために三時間の所は四時間かけてもよい考である。

備考

雨の興

凡て春は雨こそ長閑なれ、軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが、衣潤せども、降るとは見えぬ。軒の玉水も間遠に音して、棲み捨てし蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に、緑や添ひ行くも、柳の絲の動きもやうて露そふも、ともにいと長閑なれ。燈火挑げても何となく光漏りたるに、鐘の音の仄に響くも、心澄みわたりぬるものぞかし。其の外梅が香のしめり夜深くにほひわたるも、花にうしとかこちぬるも哀はありけり。

春も老いゆく頃、蛙の時得がほにすだくもをかし。杜鵑のはつ音いかにと思ふ頃、村雨のはら／＼と降出でたるも、五月雨の幾日も降暮らして、書の巻々繰返しつゝ居たれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。

又暑さに堪へかねる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風ひとしきり吹きたちたるに、柳・蓮葉なんぞの葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後には頻りに降來て、物音も聞えず、土のほひ來るもいと心地よし。軒端は玉の簾懸けたらんやうに、玉水の斷間なく落ちたるに、庭はひとつ水海となりて、或は瀧おとし、又は水走らせたるに、人々しばし物いはて、うちまもり居たるもおかし。やゝ雲薄くなれば、池の面には數ふる許雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて、餌拾ふ様なり。始め雲のたち出でしかたは、はや空の一しほ緑に見えて、虹なんぞ見ゆるに、木々の緑の庭濼に影見ゆるもいと涼し。老いたる女など、雷の音に驚きて、這出でたるが「今日のは幼かりし時のごと、よくはれにけり。今時は、かくはるゝこと稀

なり。」なんぞ、はや、緋言いふもあり。「かれはかくあはてし。」など言ひて、かたみに笑ひとよみつゝ、「今日は蚊も少かるべし。かみの音もいと微かなり。この頃の暑さも忘れぬ。」とて、端近う出づれば、夕月の光さし渡りて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、物待ち顔に空打眺みて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋くる頃の雨は、昨日に變りて、何となう寂し、萩の上風、外山の鹿の音など、日よりも身にしむ心地ぞする。常に聞き馴れし笈の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨も又をかし、まいてやゝ夜寒の頃鳴きからしたる蟲のれの、雨のをやみに微かなる聲して、枕近く鳴寄るも哀なり。この雨に木々も染めなんと思へば、「茸なども生ひ出でなん。栗もはや落つべし。」などと童べの物寂しげに、燈火に對ひつつひひ出づるも、げに様々なり。紅葉の染めそふも、白菊のうつりゆきて一盛見するも、尾花の露重げに打萎れたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりも、つきづきし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、晝過ぐる迄調み後れたる、又あはれなり。野分の風は、おどろ／＼しきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀を添ふるは、秋のならひなるべし。時雨のさと音して、夕日に白く降りくるも、又音かへて枕とふもをかし。(松平樂翁)

第三十二 般若寺の御危難

要旨

形式上では、新文字の読み方・書き方、難語句の意義、語法等につき知らしめて本文の讀解に習熟させる。

内容上では、護良親王の般若寺に於ける御危難の事實を知らしめて深く其の境地に同情し奉らしめ、傍ら當時に於ける一般人心裏に大義名分の辯が明でなかつたことを想察させて、忠君愛國

の志氣を鼓舞する。

教材

一、文字

「僧」——佛門に入つた人の總稱。又特に佛門の道理を會得せる出家の稱である。漢・吳音共に「ソウ」で訓は「バウズ」である。

「暇」——間散なる義である。漢音は「カ」、吳音は「ゲ」で、訓は「イトマ」・「ヒマ」等である。

「經」——機を織るときタテイトの義である。後轉じてタテの義となり、またスヂ・ミチ・ツネ等の義から道義・法則・聖人の述作せる書又はハカル・ヲサム・通過す等の義となる。漢音は「ケイ」吳音は「キヤウ」で、訓は「タテイト」・「スヂ」・「ミチ」・「ツネ」・「ノリ」・「フ」等である。

「卷」——一般に曲る義とし、更に曲げ束ぬる義に用ひ、今は書畫のまき物に用ゐる。書冊に卷といふのは古昔竹簡をまきたるより起つたのである。漢音は「ケン」、吳音は「クワン」で、訓は「マキ」等である。

「祈」——神明に神社を求めねがふ義である。漢音は「キ」、吳音は「ゲ」、訓は「イノル」等である。

二、語句

「笠置の城」 山城國相樂郡笠置村の東南、笠置山上にある。

「賊軍の手に落ち給ひぬ」 後醍醐天皇は賊北條の軍勢が攻めて來たのを知り給ひ、其の京都に來るに先だつて笠置に難を避け給うたが、まもなく賊のために落城してしまつて、天皇は勿體なくも、藤原時房等兩三名のお伴のものと逃れて有王山に入らせ給うたに、道に迷うて遂に賊の手にとらへられ給うたのである。こゝはそれを言つたのである。

「比叡山」 山城の國と近江の國との境にある山。かの有名な延暦寺のある山である。

「般若寺」 奈良にあつて聖武天皇の朝に創立された寺である。

「てだての全くつきたる後」 「賊の手をのがれる方法のすべてを盡した後」の意。

「大般若經」 佛教の眞髓を要説したもので全體で六百卷あるといふ。

「佛壇」 佛像又は位牌を安置する壇。

「萬死に一生を得て」 危い命の助かつたのをいふ。

「加護」 神佛が力を添へてまもり給ふこと。

讀み方に於て注意すべき語句

父帝ちちみかど 一防ひとふせ 御目おんめに 經卷きやうくわん 萬死ばんしに 一生いっし

三、文章

本文は今から約六百年の昔、妖雲が起つて、天日之がためにおほはれた世に、父天皇と共に妖雲を打拂つて、元の通り美しい天日の輝く世になさんものと、尊い御身を以て生死の間に往來して勇敢に活動し、遂に無念にも賊の毒刃に刺されて消えさせ給うた彼の大塔宮即ち護良親王の般若寺に於ける御危難を記し奉つたのである。

「笠置の城すでに北條の兵に攻破られ、後醍醐天皇は御いたはしくも賊軍の手に落ち給ひぬ。」——咄北條奴！何たる無道の極めぞや。一天萬乗の君様が臣子の手に落ちさせ給ふとは誠に恐懼に堪へない。いかに君臣の分が明かでない世とは云へ、餘りにおそれ多いことである。

「笠置なる父帝の御もとへ志して比叡山を立出で給ひし護良親王は、今更天下に御身を置き給ふ所もなく、しばらく奈良の般若寺にかくれて、時の至るを待ち給へり。」——如何に人倫の亂れた世といつた所で高貴のこの御方が、自分の身の置き所もないとは、何とおそれ多いことであるまいか。

「かくと聞知りたる北條方の僧好專、或日の夜明方に、五百餘騎の兵を率ゐて、不意に般若寺に押寄せたり。」——咄好專奴！僧の身分でありながら、人を救ふは本領でありながら、罪なき正善な人を、大切な高貴な人を、甲冑に固めた手下を多くつれて、只御一人窮し給ふ御方に手向ひ奉るとは何たる無道な振舞ではあるまいか。

「親王今のはがれぬ所と思し召し、自害せんと御肌をぬがせられしが、いや／＼、てだての全くつきたる後、腹を切るとも遅からじ云々。」——御自害！あゝ神よ願くば此の窮境を救ひ給へ。

「いや／＼てだての全くつきたる後、腹を切るとも遅からじ」とは誠に御賢明な御考である。ほつと安心した。

「佛殿の方を見給ふに、大般若經を入れたる三つの箱ふと御目にとまったり。二つは蓋をしたるまゝなれど、一つは誰が読みさしたるにや、半ば經卷を取出して蓋もせず。」——親王の窮境を救ふために神佛の與へ給うた三つの箱であるまいか。今窮地にある御一人を救ふには此の箱より外にない。

「蓋の明きたる箱に入り、經卷にて御身をおほひ、云々。」——蓋の明いた箱にかくれんか、それとも蓋したのにか、誰でも迷ふ所である。瞬間に決定して蓋の明いたのにかくれさせ給うたことは誠に御明智の閃きである。

「あの蓋したる二つの箱こそあやしけれ。明けてみよ。」——賊が今自分のかくれて居る傍の箱を明けて見て居る。此の時の親王の御胸中如何であつたらうか。

「蓋の明きたるは見るまでもなし。」——天は未だ此の善正なお方に悲しい死の時を與へないので、尙將來を與へて下さつたことは眞に感謝に堪へない。

「親王は思ひもよらず危き命を助け給ひ、たゞ夢の心地しておはしました、賊若し立歸り来て又尋ぬることもあらんかと思ひつき給ひ、先に賊兵がさがしたる箱の中に入りかはりておはします。」——何たる聰明の心付ぞや。何たる叡知の閃きであるやら。

「案の如く賊兵また取つて返し『先に蓋の明きたる箱を見残したるが心がかりなり。』とて、經卷を取出して中を改めしが、いよ／＼思ひあきらめて門外に出行きぬ。」——痛快々々また安心々々)

「親王は萬死に一生を得て、神佛の加護を謝し給ひ、態野をさして落行き給ひきとぞ。」——萬死に一生を得たる時の親王の御心の内はどんなに嬉しくおはしたであらう。全く神佛の加護として佛前に額き給ふたときの御心の内は誠に重厚な感激に震蕩しておはしたであらう。以上の諸點は特に深刻に感味させたい。

區分

第一時 全文を授く(通讀を主として)

第二時 全文を授く(内容の感味を主として)

第三時 全文の復習及び應用。

教具

地圖 挿畫を擴大した掛圖

教法

第一時

▽全文を授く。

一、先づ目的を告げて學習心を喚起し、次に各自をして自由に一讀させる。

二、各節につき彼等の質疑に應答し、後それが讀み方を檢閲して、各自に自由に一・二回讀ませる。

三、内容につきてその大體に亘つて問答し、後誦讀の練習を行ふ。

第二時

▽全文を授く。

一、各節に指名して讀ましめ、そこに於ける彼等の質疑に應答する。

二、各自をして意義を十分意識しながら自由に一・二回讀ませる。

三、内容につき問答する。

「文章」の部に記する所を参照し、深く激動させ、深く感味させる。

四、誦讀の練習を行ふ。

各自自由に——また指名して。

五、書取

御危難 賊軍 父帝 僧 暇なし 大般若經 誰か讀む 經卷 乃 神
佛に祈る 天井 萬死に一生を得……等。

第三時

▽全體の總括的復習及び應用。

一、復習。

自由に一讀——質疑に應答——内容につき問答——表現法につき問答。

二、練習應用。

(1) 次の語句の意味をかゝしめる。

賊の手に落ち給ひぬ 時の至るを待ち給へり 不意 佛殿 大般若經 經卷
息を殺して神佛を祈る 佛壇 案の如く 萬死に一生 神佛の加護 落行き給ふ

(2) 次の語句を用ひて經文を作らせる。

折から てだて 息を殺して あやしんで 萬死に一生を得 思ひあきらめて

三、批判

兒童と共に鑑賞的批判を行ふ。

四、家庭課題

次の文語を口語に直させる。

賊軍の手に落ち給ひぬ 般若寺にかくれて、時の至るを待ち給へり 一防ぎ防ぎて、落
ちのび給ふ暇もなし 自害せんと御肌をぬがせられしがかくれて見んと思ひ返し、誰か讀
みさしたるにや 突き立てんと 親王はいづくにも見え給はず 賊兵は其のまゝ立去
りぬ たゞ夢の心地しておはしましゝが、又尋ぬることもあらんかと思ひつき給ひ 先
に蓋の明きたる箱を見残したるが心がかりなり 熊野をさして落行き給ひきとぞ

教授上の注意

- 一、本課を取扱ふ前に、護良親王の御一生につき、簡明に話すがよい。(備考参照)
- 二、第一節は親王の父帝即ち醍醐天皇の御事について記し奉つたのである。でかくなつた顛末についても簡短に補説するがよい。
- 三、本課は言ふ迄もなく文語體で叙述したのであるから、之を口語に譯する力を啓培して行くことも忘れてはならない。また用語にも敬語が多く使用されてあるから注意させるがよい。
- 四、本課に於ては親王の其の御危難の境地に、御心境に、深厚に同情し奉るのは勿論、また當時

の一般人心裏には大義名分の辯が明かでなかつたことをも想察させるがよい。

備考

護良親王

初め尊雲法親王といふ。また延暦寺の大塔におはせし故、世人は大塔宮と稱す。後ち還俗して尊邦・尊形といへることあり。遂に今の名に改む。後醍醐天皇の第三皇子、御母は源親子、權大納言師親の女。後醍醐天皇の北條氏を圖り給ふや、親王また其謀に參與し、まづ近畿諸大寺の僧徒を引いて與黨と爲すの必要を感じたるより、嘉暦元年九月梶井殿即ち梨本門跡となり、大僧都に任じ、二年三月三品に叙し、天臺座主に補せらる。是に於て務めて山門衆徒の心を收攬せり、元徳元年四月職を辭し、十二日還補す、二年勅して延暦寺の大講堂を修し、三月天皇親臨してこれを慶し、親王を以て新堂咒願師と爲し、二品に進められたり。四日また座主を辭し、専ら密謀を畫策したりしが、元弘元年謀洩れし故に、天皇は近臣數人を從へて笠置山に幸し、藤原師賢に、天皇の御衣を着して、延暦寺西塔に至らしむ、僧徒以て天皇となし、競うて西塔に集る、親王即ち弟尊澄法親王と共に、別に僧兵を將ゐて八王子に陣す、明日六波羅の兵來り攻むるや、討つて之を卻けしと雖、僧徒漸く眞の天皇に非らざるを知り、散去せるが故に、親王は遁れて楠木正成の赤板城に入り、尋てまた城を出て、大和十津川より吉野・熊野・高野の間に出没し、二年遂に吉野の大衆を語らひ、愛染寶塔に城廓を構へて之に據り、また密使を諸國に派し、令旨を傳へて勤王の兵を擧げしむ、應ずるもの多し、三年(正慶二年)北時高時、二階堂貞藤をして吉野を攻めしむ。親王防戦せしと雖利なく、遁れて高野山に入る。既にして天皇船上山に幸し、官軍大に振ふ。親王即ち河内信貴山に往き、毘沙門堂に居りしが、赤松則村の兵京師を攻めて利なきを聞き、更に令を延暦寺僧徒に下して則村を援けしめたり。會々新田義貞高時を斃し、足利尊氏等京都を復せるを以て車駕宮に歸り給ふ。是に於て六月十三日親王入洛して天顔を拜し征夷大將軍となり、兵部卿に任ず。然れども同八月に成良親王が征夷大將軍となりたるをおもへば、將軍就職の時日は極めて短かりしがごとし。此時に當り足利尊氏は累世の名家たるの故を以て當諸將の上に出で最も勢力あり。親王密かに之を除かんことを圖り、尊氏もまた親王の威名を忌み懼を見て斃さんと欲し、相

互に反目するに至れり。而して親王の企策せる所未だ成らずして謀洩れ京師騒然たり。會々准后新待賢門院は、親王の勢力熾んたるを見て其出なる成良親王の太子たるを廢せられんことを恐れ、尊氏と結托して護良を天皇に讒す。是に於て天皇は、一方には尊氏の心を解かんがため、一方には門院の讒に動かされ、建武元年十月親王を捕へて常盤井殿に幽す。翌日に至り鎌倉に護送し足利直義に預けらる。直義即ち二階堂ヶ谷なる東光寺に幽す。二年七月高時の遣子時行蜂起して鎌倉を襲ふや、直義之を拒ぐこと能はずして西奔するに及び、二十二日の夜淵邊義博を遣はして親王を弑せしむ。御年二十八。後其の地に就いて鎌倉宮を建てて之を祀る。東光寺の御所は細々要記、神明鏡、太平記等には土牢を塗りて置き奉るとし、神明鏡には土樓と記したり。土牢、土樓は共に塗籠の事にして、即ち東光寺中の壁を塗りたる室の事なり。世に土窟なりと思へるは大なる誤りなり。(國史大辭典に據る)

修正尋常小學讀本教授細案 卷九終

大正十一年六月二十七日印刷
大正十一年六月三十日發行

定價金壹圓九拾錢



修正尋常小學讀本教授細案

第九卷

著者

野澤正浩

發行者

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地
目黑甚七

印刷者

東京市神田區三河町一丁目十六番地
川上隆

印刷所

東京市神田區三河町一丁目十六番地
凹版工業株式會社

印刷所 凹版工業株式會社

發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目
新潟縣長岡市表四ノ町(本店)

目黑書店

(東京) 電話京橋二一六三番長 電話長岡一八八番
振替口座二八〇九番(岡) 振替口座三六一九番

2632
104

察餘錄

目錄

終

